

CITY & LIFE

都市のしくみとくらし

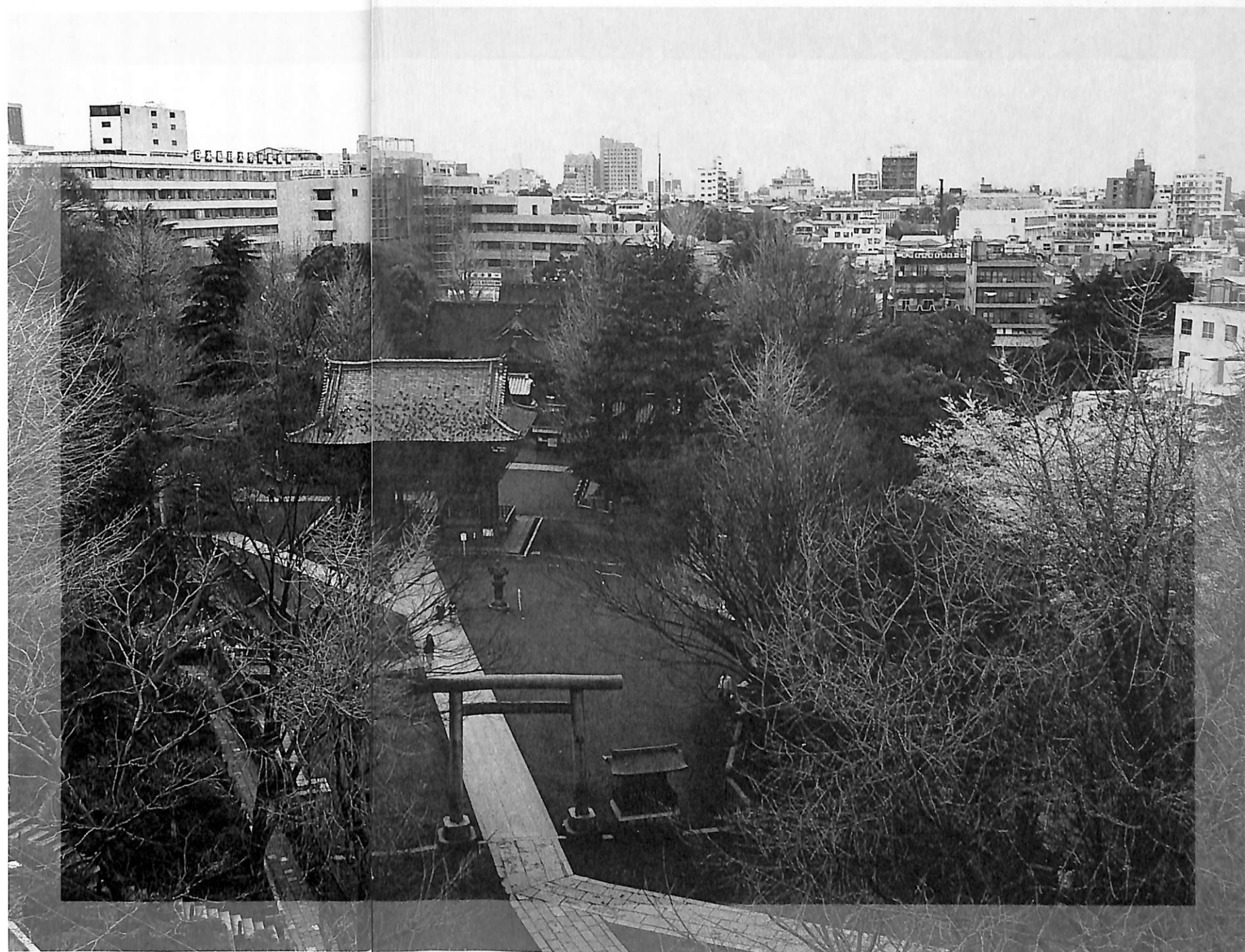
1986・初夏号

Vol. **6**



特集 都市生活と神社仏閣

急激な都市化は、大都市に著しい新住民の流入現象をもたらした。その結果、すでにきずなの弱くなっていた氏神と氏子、菩提寺と檀家の関係はいつそう希薄になろうとしている。にもかかわらず、初詣、交通安全、受験などに際しては、リクレーション的、保険的、いこいの的に市民は神社仏閣をとらえていろいろな機能を果たしているのだろうか。その特異な空間性にふれながら、都市生活と神社仏閣との関係をさぐってみたい。



東京・根津神社

■Contents■

特集◎都市生活と神社仏閣

- 江戸の都市空間と神社仏閣/陣内秀信 ————— 2
- 〈座談会〉都市の聖なる空間/
伊藤いじ・樺山紘一・鈴木博之 ————— 5
- 東京の霊的施設「神田明神」/荒俣 宏 ————— 10
- 神社仏閣の空間演出の仕掛けをさぐる/大江 昭 ————— 12
- 社寺建築の見方/三浦正幸 ————— 15
- いま、神社空間に求められるもの/上田 篤 ————— 18
- 札所とひろば 昔と今/加藤仁美 ————— 22
- 町人の街・中央区の全神社調査 ————— 25
- まちづくり思い出ばなし⑤/高山英華 ————— 28

INFORMATION/編集後記

表紙絵●Ralph Fasanella

写真●普後均 P.1,3,6,10,11,14,18,19,20,／神山貞次郎 P.8,9,／徳田敦司 P.6,7,／杉山昭造 P.27

江戸の都市空間と神社仏閣

陣内秀信

●プレ江戸期からの宗教空間

江戸の神社仏閣を調べようとすると、徳川幕府が江戸の城下町をつくった以前の時代に遡って、考えてみる必要があります。たとえば、上野の寛永寺の場合を例にとってみると、この寺がある上野台地は、谷中を含め森に包まれた聖なる空間、すなわち霊域としての性格をもっていました。このような上野の場所の性格が形づくられたのは、一般的には、寛永寺が建立された寛永二年（一六二五）から、明暦の大火（一六五七）以後の寺社地の移転にともなう谷中寺院街の形成期と考えられています。しかし、日本の都市空間の変遷の歴史を見ると、土地の気配を感じながら、うつろうとした高台を聖域とする見方は古くからありました。この地区に関して、徳川入府以前のプレ江戸期の原風景を見ると、上野台地の少し奥まった谷中周辺には感王寺（天王寺）、善行寺がすてにあり、一方、上野・谷中台地の西には谷の低地が広がり、この低地には千駄木・駒込村といった農村が点在していました。結局、上野周辺には低地に農村地帯、そして少し奥まった高台の上野・谷中周辺には幾つかの寺院が存在して、山と谷が組み合わされた景観をもつ聖域としての場所性が既にプレ江戸期に形成されていたと考えられます。

このように上野は、単に台地と低地という地形上の構造だけではなく、同時に上野の森へ山の辺」と不忍池へ水の辺」という二重の空間構造をもっていたことが分ります。したがって、江戸の町が発展し拡大する過程で、上

野は山の辺、水の辺に恵まれた自然環境をもつ名所として都市の北辺に成立することになったのです。

プレ江戸期からの聖域としての性格は、一六二五年に、幕府の祈禱所として寛永寺が上野に建立されたことよって著しく高められました。周知のように、東叡山寛永寺は、東国の比叡山延暦寺として見立てられ、不忍池は琵琶湖、さらに不忍池弁天島は竹生島になぞらえたのです。

そういう京都の町を模した町づくりが、宗教空間を設定するときに生かされたわけです。そんなふうにながら、北東の鬼門の方向に寛永寺、南西の裏鬼門の方向に増上寺を配置し、大まかな都市の構図が決められたのです。

やはり江戸時代に寺町として発展した浅草や麻布の場合も、七世紀にさかのぼる浅草寺、九世紀にさかのぼる善福寺というプレ江戸期からの寺をそれぞれ核として栄えたのです。

●聖と俗の二元空間構造

これはよく言われることですが、寺が都市の外側にくられたときに、ひとつの役割として、寺が都市の開発をプロモートするということがあります。つまり、周辺のまだ未開発の農村部に寺をつくって、そこがいわば先兵になって門前を活性化し、都市的な空間をつくっていくわけです。それが盛り場とか自由空間になっていく。もともと江戸時代の幕藩体制の中では自由がなかったわけですから、芝居が行われたり、岡場所があったのは寺

社奉行支配下の比較的規制の緩やかなところだったようです。いずれにせよ聖と俗の二元空間構造が成立することによって、そこがシンボリックな空間になり、結果的に名所・行楽地、盛り場の生れる場所となったわけです。

地形と結びついて成立したそうした二元空間は、また都市の中に散らばっていましたから、人々が都市全体を認識するためのいわば座標軸の役目を果たしていました。景観的にも際立っていましたから、複雑そうに見える江戸を理解するために、「あそこには〇〇のお寺がある地域だ」というように、認識上の重要な地点になったのだろ

うと思います。それを裏づけるようにそうした場所を紹介したガイドブックが沢山できましたし、名所双六のようなルート・マップのようなものもできました。ですから、寺のある場所は単なる宗教空間というだけでなく、イベント空間であり、また盛り場や見せ物が出る解放区にもなる都市の重要な文化的役割を果たすところだったといえるわけです。

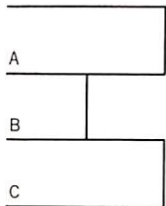
●コミュニティとの密接な関わり

神社にも寺と似たようなところがあるわけですが、神社の場合は、寺と違って地域に密着しているわけです。地域の氏神であり、鎮守の森ですから、これはコミュニティと密接に結びついているわけです。今までの私たちの常識からすると、神社というのは非常に地縁的なものだから、一度できてしまうと移動しないものだと思いがちなのですが、実はそうではなくて、よく引っ越しているのです。

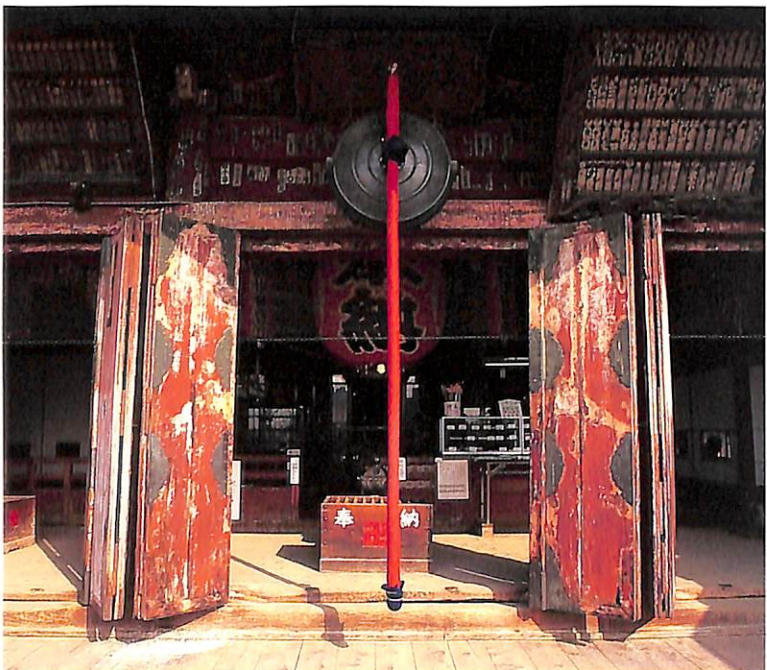
神社も江戸以前と、江戸の徳川幕府がつくった城下町の形成段階とは違う場所に移動しているのです。なぜ移動したのかといいますと、神社の配置には一種の理念型があるからです。つまり人間の住む環境にとって、神社はどこに設置されたらよいか、どこに置けば地域の住民に具合がいいのかというような、理念型があったのだらうと思うのです。よく農村にいきましたと、山の斜面に神社があり、参道があつて、それを降りたところに集落

があり、その周辺に田畑や川がある、そういう立体構造がありますね。この場合の山は一種の聖なる神体山なわけですが、この山を背後にもちながら、集落というコミュニティと隣接させた空間的な配置の仕組みがある。これが一種の理念型です。私の研究室の伊藤一男君が修士論文『地形から読む江戸東京の都市空間』で、地図と地形とを関連させながら、江戸の町と神社とコミュニティの関係を読み解くという面白い研究を行いました。それ

によると、農村でみられるような理念型が江戸のような大都市においても同様にみられることが分ります。江戸においては、平坦な低地に町人地ができていて、そこを登っていった奥の方に神社が設けられているわけです。そして、その市街地を降りていくと、東京湾に出るし、江戸の中心の城の方に出るわけです。ですから放射状の配置の中で、いちばん奥まった高台の端に神社が置かれて、そこから降りてきた裾の部分に氏子コミュニティができています。そういうパターンはあつちこちにあります。典型的な例として、根津権現と根津の町や三田権現と三田の町などが挙げられます。そういったところは



A 東京・根津神社
B 不忍池と弁財天
C 東京・寛永寺



都市の聖なる空間

ヨーロッパのキリスト教会と日本の神社仏閣

伊藤ていじ・樺山紘一・鈴木博之

鈴木 本日は「ヨーロッパのキリスト教会と日本の神社仏閣」というテーマでお話をうかがえればと思っております。私は、現代の生活の中で神社仏閣の空間というのは意外に大きな意味をもっているのではないかと思います。たとえばヨーロッパの都市を考えた場合、キリスト教の聖なる空間というのはどういうところにあったのでしょうか。それは俗なる空間とどういう関係をもっていたのでしょうか。

樺山 ヨーロッパではもともと初源には、聖なる空間と俗なる空間を、必ずしもはつきりと区別していなかったと思うのです。それが、ヨーロッパにキリスト教が入ってきて定着し始める頃、いわゆる中世の時代ですが、この間にヨーロッパ人のなかに「聖なるもの」あるいは「聖なる空間」が意識され始めます。それまではやっぱりヨーロッパ人だって、森の中に神様がいましたし、アニミズムと言われるような感覚を強く持っていて、われわれ日本人と比較的近い空間意識をもっていたかもしれませんが、キリスト教が定着し始める頃、教会が建設されますが、まず大きな役割を果たすのは修道院が貴族が個人的にもっている礼拝堂ですね。われわれが知っているパリのシャルトルのノートルダム寺院といった堂々たるゴシック教会ができるのは一二世紀の後半以降です。それまでは、あんなどえらい教会が都市のど真中であってその回りに広場があるというような、今のヨーロッパの都市と

広場と境内

座談会

伊藤 僕はあまり似ているという感じがしませんね。ヨーロッパの広場というと文字通りの世俗的な広場でしょ。日本の社寺のように石燈籠といったものは置いてないけれど(笑)。まあ、それはさておくと、たとえば江戸中期以後ですけれど、大部分の寺はある意味では大衆化されていて、お祭りや縁日の時にはお寺の坊さんも信者やテキヤさんといっしょになってイベントやるわけですよ。テキヤはシヨバ代払うかわりに境内で商売し、信

●江戸・東京はユニットの集合体

さて、両神社の氏子分布の境界は、一般的には日本橋川をはさんで二分されているといわれています。しかし、『東都歳時記』などにもつき実際に神輿ルートを地図上におとしてみると、日本橋川よりやや北上した小さな堀割のあたりで二分されていることが分ります。いずれ

それを実現させるために、神社を他所から移動させるわけですね。根津権現の場合というと、農村部の千駄木からわざわざ現在の場所根津へもってきた。そしてコミュニティと神社を結びつけることによって門前町として栄えさせ発展させる、そういうことをやるわけです。

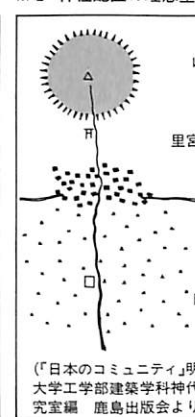
それとは逆に、江戸の町の中心部にあった神社を外へ出して、その裾にコミュニティをつくった場合もあります。市ヶ谷八幡がそうです。また中心部に閉じていうと、平将門を祀り江戸城の鎮守的性格をもつ神田明神と、天祭を行なう幕府の産土神としての山王日枝神社は、もともと江戸城の域内にあったものですが、江戸城下町の形成・拡大にともない、神田明神は外神田の高台の地に、山王神社は赤坂溜池の高台の地に移転させられたのです。歴史的にいえば、神田明神が元和二年(一六二六)、山王神社が明暦三年(一六五七)になります。この移転は都市全体の中の配置からみると、幕府の菩提寺である寛永寺と増上寺が江戸の鬼門の位置に置かれたのとよく似ており、また両寺院の権力を二分させて対立性を巧みに生み出したのも、その性格が相似しているようにみえます。ここに都市づくりに対する幕府の意図的操作を想像することもできます。

こうして、江戸の町において地縁的な性格をもつ神社は、重要なコミュニティの象徴としての役割をもったのです。そして、その構造がくつきり浮かび上がってくるのは祭りのときです。祭りの日には、この日常的な聖なる場が、より祝祭的な空間に転じ、コミュニティの団結・連帯がそこで確かめられました。そしてまた、境内へ参道・門前・町内と展開する理念型としての地域の空間構造が、祭りの日には神輿ルートという形をとってその明確な姿を現わすのです。御神体を運ぶその道筋に、ふだんは目立つことのないコミュニティの空間構造がくつきりと浮かび上がってくるのです。地形を読み込みながら、聖域と日常的なコミュニティを組み合わせてきたエリ

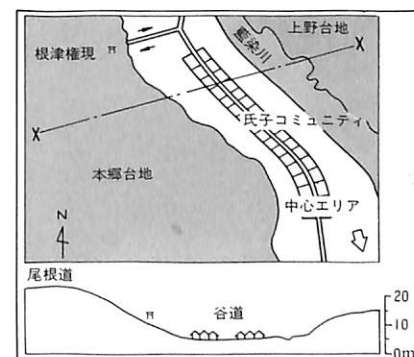
※1 <山の辺><水の辺>の概念図



※2 神社配置の理念型



※3 江戸の神社の分布構造



※4 根津権現の神輿ルートとコミュニティ

アが江戸の各地域に置かれていて、そのユニットの集合体として、江戸というものが、あるいは東京というものが成り立っているわけです。で、そのあり方は今でも変わっていない。だからこそよくいわれるように、東京は数多くの町から成り立っているということがいえると思います。そしてそれぞれがアイデンティティをもっている。あるいは競争心、プライドをもっているわけです。それと同時に、農村にみられたコミュニティの構造と神社の配置に、大都市である江戸の中の宗教空間やコミュニティのつながり方が非常に似ていることが分ります。この江戸の構造は、現在の東京にも、受け継がれています。ただし、市街地化が進み、地形を見えなくするようなビルや高層ビルが立ち上がり、土地利用の変化が起きているにもかかわらず、この江戸の空間構造は見えにくくなっていますが、表層を剥がし読み解こうとすれば、今いったような宗教空間とコミュニティ、そのベースである地形、そういうものが鮮やかに浮かび上がってくるのです。(談)

(じんない・ひでのぶ 法政大学助教授)



東京・銀座三越屋上の稲荷

者はお金を払うかわりに安上がりの現世利益の満足感を感じる。お寺はシヨバ代としてテラ銭を稼ぎお賽銭も稼ぐ。これは宗教の名を借りた一種の企業集団です。

樺山 教会前の広場だって、見せ物をやったり市が出たりというイベント空間なんですよ。もともと教会が勧進元で自ら組織し興行したわけではありせんけれども。

伊藤 日本の場合には、お寺がインシアチブを取る。それで損した、得したって言うてるわけ。

樺山 いずれにしても、日本の場合には境内ですものね。

伊藤 寺社奉行のね。

樺山 寺社奉行の支配地ですよ。寺社奉行の支配を離れて参道が別にあるって、これは北町奉行の支配地です。

この間にはもちろん繋がりはあるけれども、一応空間としては別ですよ。ヨーロッパの場合には、広場も街路も境内地ではないのです。

鈴木 境内地にあたるものは教会にはないんですか。

樺山 いや、ないわけではありません。しかしちょっと違いますね。これは見世物などをやる空間ではないのです。廻廊を持つている教会がありますね。都市の中の教会。

伊藤 中世の頃ですが、日本でもお寺の境内でやる。仏像の本堂の前で。その上前をまたお寺がとるわけでしょう。似てるのかなあ。

鈴木 そうすると、神社仏閣というのは聖なる核であるけれども、じつは俗の部分ももっていてそれで都市がうまくいくという、そういう性格をもっていたということになるわけですね。ただここで少し話を現代の方からきりかえてみますと、現代の都市というのは中世のヨーロッパ、あるいは日本という戦国時代から江戸時代に続く農村社会を基盤とする時代とは大きく変わってしまっている、たとえば年に一度のお祭りとかいうようなものはわれわれの生活のなかからなくなっているということとがあります。今の生活の中で、そうした「聖なる」場であると同時に、俗なる場である空間はどうなっているのでしょうか。

伊藤 かなりそういう感じが失われているなと思うのは、かつては神社の前へ行くとき必ずおじぎをした。社会的習慣としておじぎをするものだった。不思議とも思わなかったね。じゃ、お寺はどうだったかというと、宗派によって違おうけど、私の家は真宗だったからやっぱりおじぎをした。

鈴木 確かに、昔、いや戦後になってからも、東京で神社の前でおじぎをしたり、電車の車中からでも神社の前を通ると、ちよつと拝むとか、そういう光景に出会ったことを覚えています。ヨーロッパでも、十字をちよつとさるといふのを見かけたことがあります。

樺山 もちろんカソリックとプロテスタントでは違いますが、カソリックですと教会だけでなく、街のすみこに小さな祠ほこがあって、その中にマリア様がいますか、あそこじゃがんで、十字をきっていく人がいますね。ただ昨今の社会はすっかり世俗化してしまいましたから、その意味では昔あったような聖なる空間、聖なる施設が

会にもありますが、あれは修道院の名残りともいえるもので、都会の中にこんながあるかと思うほど、ひっそりとした雰囲気をもった空間があります。あれが境内地にあたるものなのです。専門的にいうと教会参事会員という聖職者達が共同生活をする場所なんです。廻廊は普通の人間でも入れますけど、あそこ市を出したら具合が悪い。

伊藤 日本の場合には、境内地の利用のされ方を見ると分りますが、一般の住民とお寺とは非常になじみ易い関係にあったと思う。その意味で境内地は文化の場所だったという感じがある。普通の庶民にとつてのね。程度はあまり高いとはいえないけれど（笑）。

渋谷のハチ公はシンボルとしての聖なるもの

樺山 ヨーロッパでもね、お祈りするために教会に行つて、他の世俗事項はみな教会と切り離されていたというわけではないんです。教会は聖なる空間でお祈りするためだけにあるというのはカルバン主義のような教会で、そんなのはヨーロッパでも非常に新しいものです。表現は悪いけれども、それまでは教会はいわば「聖なるもの」を垂れ流していたんです。都市空間のなかに。たとえば教会の前にある広場には十字架が立っていますが、十字架が立つことによつて空間を浄化ヒヨウアイする。だから市が開かれてもここはごまかしてはいけません。

伊藤 でもね、カソリックだけでもいけないけれど、贖罪すれば罪は許されてしまうでしょ。いくら悪いことしても。

樺山 今おっしゃった懺悔制度、これは告解制度が成立したり、あるいは死んだ後煉獄というのがあるってそこでもまれてきれいになって天国へ行けるという考え方が生まれたらしたのと、都市が本格的にできあがって、教会

重要性をもたなくなつたのはあたり前だと思います。けれども、最近よくいわれるように聖なるものは実体としてはなくなりつつありますが、記号としての、あるいはシンボルとしての聖なるものというのは現代社会のなかでも同じように存在すると思うんです。たとえば渋谷のハチ公の銅像。あれは渋谷の駅前広場のシンボルであつて、新しいお地蔵さんだといえるんじゃないでしょうか。伊藤 銀座の三越の屋上に、祠ほこがありますね。それを少し離れて眺めていると、ここは聖と俗との対比よりもむしろアミューズメント・センターの源流とか店のシンボルみたいな感じが強いですね。

都市にスピリットを与える寺社地

鈴木 そういう記号として、またシンボルとしての聖なるものを現代の都市のなかにも掲げ所としてもちたい、あるいはつくりたい、そういう気持ちがあるのは確かです。今まであった大きな神社もなくなつていく、けれども丸裸になつて境內がほとんどなくなつた、ということもある。こういうのは本殿があるからいいや、とは思わないでやつぱり寂しさを感じる。また、かつては盛大であつたお寺が今ではすたれてしまつたけれども、かろうじて境内がそのまま残っていることで安らぎを感じる、ということがあると思うんです。それは神社仏閣の空間が、今の都市に対してなにか意味をもっている、というふうには考えられないでしょうか。

伊藤 日本の場合それは非常に選択的だと思ふ。現世の利益に都合のいいものは残すけれど、関係ないものは哀れな姿になつてしまふところがある。

樺山 そうでしょうね。境内地を残して、駐車場にしたりにしているところもありますから（笑）。ただどうでしょう、東京や大阪のような非常に大きな都市でまとまつた

イタリア・ヴェネツィア・サンジョルジョ・マジオーレ教会の回廊



が都市の中で役割を果たすようになる時とは一致しているんではない。つまり身近にある教会でいったん清められてまた俗空間に戻つてきて悪いことをする、そういう機構をもった聖俗空間が都市に不可欠でした。

鈴木 悪いことをする場というか、俗の空間を教会の前の広場に用意した、という感じでしょうか。

樺山 たとえば、芝居は本来からいうと受難劇で「聖なる」演劇ですから、教会の祭壇の上で行なわれるべきものだけれど、幕間狂言は教会の前の広場でもやる。これはかなり際どいセリフが入つた、いわば神をパロディ化するような芝居で、それを教会の前でやるんです。

スペイン・トレド大寺院の天高くそびえる塔



空間という寺社地が多いんじゃないでしょうか。土があつて、緑があつて、石段があつて、燈籠があつて……通常の都市空間とは違うものが残っている。だから神社やお寺は緑という自然のなかにひたり、日ごろの都市的な空間から解放される感じがありますね。ヨーロッパの場合は、境内地がないといっても、教会の中はアジールになつていて。ようするに犯人が逃げ込んでも逮捕できない空間なんです。

鈴木 今でもそうなんですか。

樺山 ええ、教会の中では逮捕しません。法律的には可能だとしても、道義的にいうか心理的には許されない。中世の日本でも、神社の中は一種のアジール空間で、世

俗的な空間とは違う感じがあります。ところで、現代の都市に話を戻すと、実体としての聖なる空間がなくなっただけというけれど、お墓ね、あれはまさに聖空間。いうまでもなく死んだ人間が埋められているわけですから。しかも、東京の場合、ネオンのキラキラしたところのなかにあつたりするから強烈ですね。教会では、聖職者は教会の床の下に埋葬されています。

鈴木 ただ江戸時代から、都市計画的に寺社地を移すというのをやっておりまして、その時墓地を都市の外へ出したかと思いますが、あれは都市のスプリットを失わせると言うんです。そういう意味でいうと、聖なる空間というのは都市にダイナミクスをつけるというか、メリハリをつけるもので、それはやっぱり今でも生きてゆくべきものなのではないでしょうか。

樺山 もうひとつ、聖なるものということについて、日本の場合には少ないけれど、キリスト教会の場合タワーみだいに高いのをつくりますね。あれはようするに依代（いだい）なんですよ。都市のなかのタワーというのは森の形象だというけれども、神が天から降りてきたり、逆に人間が天に登ってゆく経路なんです。それがやっぱり聖なる空間には必要なんですね。

伊藤 そういう建物の違いという、日本人だったら質問しないようなことを西洋の人から聞かれたことがあります。それは、キリスト教の教会ではなかに入ったら次第に明るくなるけれど、日本の仏堂では奥へ行くほど暗くなる。あれでは御本尊が見えないじゃないかと思うんですね。

樺山 教会も暗いですよ。ゴシックになってから明るくなったんですよ。

伊藤 でも日本の密教のお寺なんか比べたら教会堂は明るいですね。延暦寺の根本中堂なんか行ってごらんさない、ほとんど何も見えないから。で、僕はこういったん

だ。あれは意識的に暗くしてるんだ、と。そして燈明と護摩だけで光を投げかけ本尊を神秘化しているのだと。樺山 密教は確かにそうですね。キリスト教でもほんとに明るくなったのは電気ができてからですからね。

神奥が都市空間を広げる

鈴木 話はちよつと変わりますが、神社のお神輿というのは、都市空間を考える時に面白い要素になるんです。勤め先が本郷でその近くの人に聞くと、昔はこのあたりで神輿を担いで行くと、どんな大きなお屋敷でも、なかに入れるというんです。だから三菱財閥の当主だった岩崎さんのお屋敷なんかも、お神輿を担いだ時にだけ中へ入れる。つまり、お神輿を先導にすることによって都市空間が門戸を開いてゆく機能があつたんじゃないかと思うんです。お神輿が、練り歩くことで都市空間が広がってゆくというように。

伊藤 それは非常に近代的な感じだね（笑）。本当はかつぎ手の経済的関心の方が強いのではないですか。きつと岩崎さんにしてみればいい迷惑だったろうと思うけど、確かにそういうことがあるのかもしれない。

樺山 お神輿というのは、犬が電信柱にオシッコをして廻るようなもので、テリトリー宣言ですね。お神輿が廻るところが神社の支配空間なんですよ。

鈴木 境内がただひとつの核であるけれども、そこを飛び出して練り歩くとまた広い領域が現われてくる。

樺山 ヨーロッパにもありましてね。もちろんお神輿とはいきませんが、プロセスジョンというんです。やっぱり御本体を担ぎ出してきて、自分の支配している領域をグルッと廻ってくるわけです。ミサと並んで必ずやらなければいけないお祭りのなかの一番大事な行事のひとつなんです。

な、新興の住宅地に住む人たちですよ。京王線に乗って、高幡不動尊に行かずに新宿へ出てくる。本殿の建物があるかどうかにかかわらず、二種類の聖空間が都市のなかに雑居しているように思えますね。

鈴木 ファッションナブルな原宿に隣りあう代々木公園だって、明治神宮の境内のように聖なる空間になるかもしれないですね。

樺山 まあそれはやってみなければ分らないけれども、案外横にあるNHKやオリンピック競技場が本殿になったりしてね（笑）。

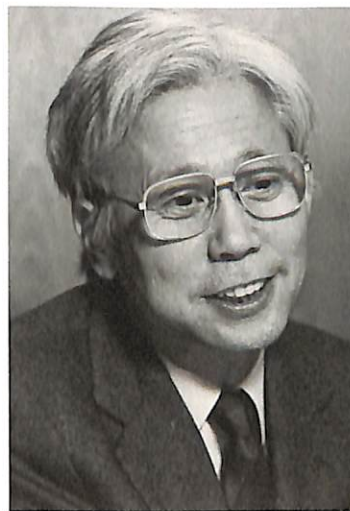
鈴木 そうだとすると旧来の神社仏閣というのは徐々に死んでゆく運命にあるんじゃないでしょうか。

伊藤 いま都市の神社仏閣は建て替えてるからね、今度新宿にできたビルでは、一階が佛寺で、その上がオフィスになっている。造形的には本堂とオフィスビルとの間には区別がなくなりつつある。でも、じゃ新宿は聖空間かというところと違うんじゃないかという感じがする。あれは人が集まるから集まるんで、ボディ・ヒーティングだよ。むかし能野神社へお参りに集つたのと本質的には変わらない。

樺山 そうですね。確かに一方では、毎年何百万人という人間が初詣に行くし、その数はますます増えつつあるといわれる。やっぱりどこか聖地へ行くという感じがあつた、本来の意味に近い聖性がかえって今また芽びいているといえないこともないですね。

鈴木 聖なる空間というのか、神社仏閣的なものは、形を変えつつ常に都市のなかで生きてゆくであろうということが、ひとつ結論になるのかもしれないですね。今日はどうもありがとうございました。

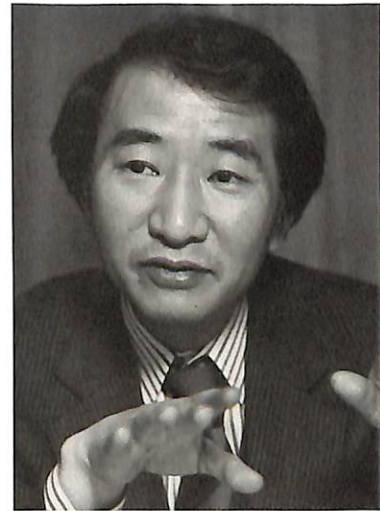
イタリア・ドーム寺院と広場



伊藤ていじ (いとう・ていじ) 工学院大学教授



樺山絃一 (かばやま・こういち) 東京大学助教授



鈴木博之 (すずき・ひろゆき) 東京大学助教授

ここ数年来、霊都東京というイメージにこだわっている。たまたま書きはじめた伝奇小説『帝都物語』（角川書店）の取材も兼ねてのことだが、もちろん京都や奈良といった古い伝統をもつ神聖都市とは比較にならないとしても、霊性の名残りみたいなものが東京のあちこちで今も発見できる。

たとえば、江戸から明治にかけては、古い地相占術や鎮守の思想から生まれた霊的建造物がずいぶん造られた。上野寛永寺は京都の比叡山延暦寺を模した寺だが、延暦寺は京の鬼門（艮の方角）を守護するために建てられたといわれ、寛永寺もまた鬼門守護の霊的な要塞になっていた。また明治に建立された上野公園内の西郷隆盛像は、官軍に最後まで抵抗した彰義隊ゆかりの地にあって、官軍の大將の一人西郷が亡霊たちの復活を阻止する要石のような役割を果たしている。日枝神社、神田明神なども江戸の守護神役を担っていたことは、申すまでもない。

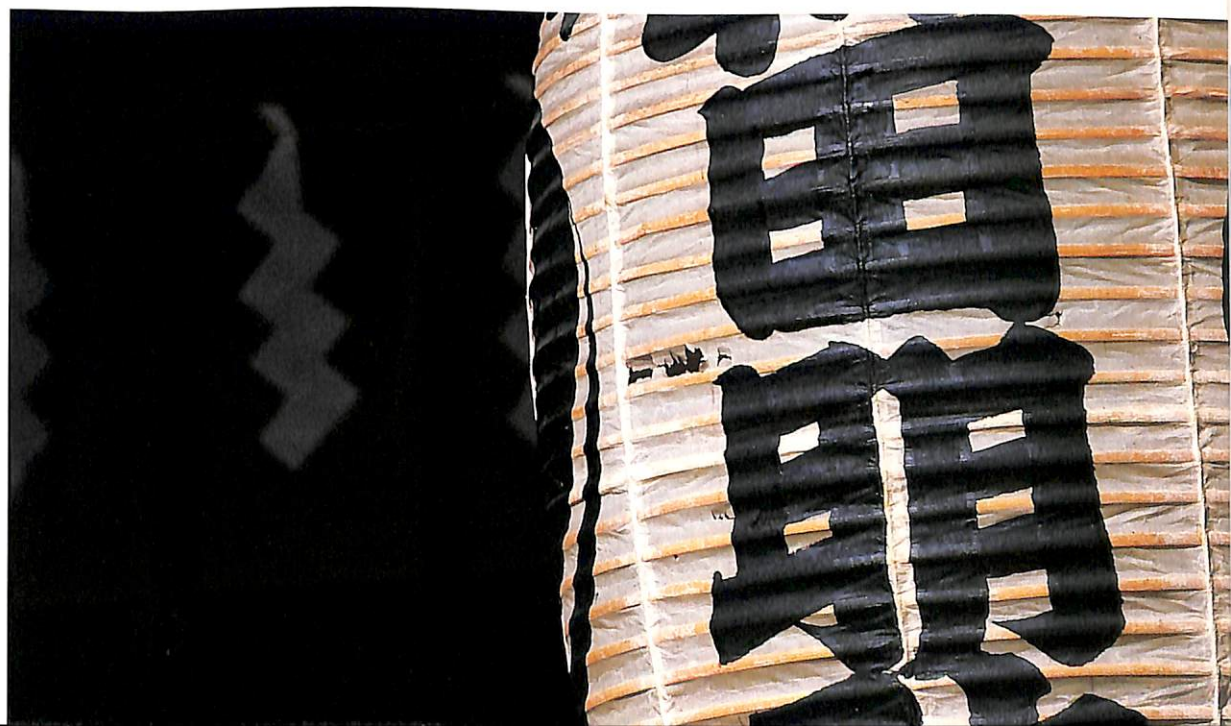
しかし、伝説や逸話にいろどられた最も興味ぶかい霊的施設は、御霊平将門を祀った神田明神（神田神社）だろう。

現在、湯島聖堂と道を挟んで向かい合う場所にある明神は、もと柴崎村（今の大手町付近）の神田橋御門内にあった。神田という名は、文字どおり「神の田」の意味で、往古はどの国にも二、三個所の神田があり、そこでとれた初穂を大神宮に納めていた。またカンダは元来「カラダ」（韓田、唐田）だったともいわれ、大陸から渡ってきた稲作文化に関連がある。いずれにしても武蔵の国の地主神だったわけで、土地の住民に厚く崇拝された。

ところが、この神田明神に平将門の霊が合祀されたことから、問題がややこしくなった。関東の地に独立ユートピアを築こうとした平将門だったが、百足退治で有名な藤原秀郷に討たれ、怨霊となった。なにしろ京に運ばれて晒された生首は、いつまで経っても腐らず、夜な夜な関東に向かってカラカラ笑ったとも、切り離された体のほうを呼び寄せようとしたというから、すさまじい。当然、武蔵の豊嶋あたりにには祟りがあって、人々は飢えや病気に苦しんだ。

一四世紀の中頃、そこへ一遍上人の高弟真教上人という人が訪れ、将門の怨霊に「蓮阿弥陀仏」なる法号を贈って、柴崎村の蓮池のほとりにあった神田明神に合祀した。すると災いはピタリと止み、以後人々は将門を土地の神として崇めたという。

荒俣 宏



東京の霊的施設「神田明神」

旧神田明神はこうして「将門の首塚」と呼ばれ、また神田明神の名は、切り離された将門の屍体を埋めたことから起きたもので、本来は「骸明神」だった、などという縁起譚も語られるようになった。江戸時代にはいると日枝や赤城神社と並ぶ大社となり、ちょうど将門の夢を実現させた恰好になった徳川幕府の手あつい庇護も受けた。

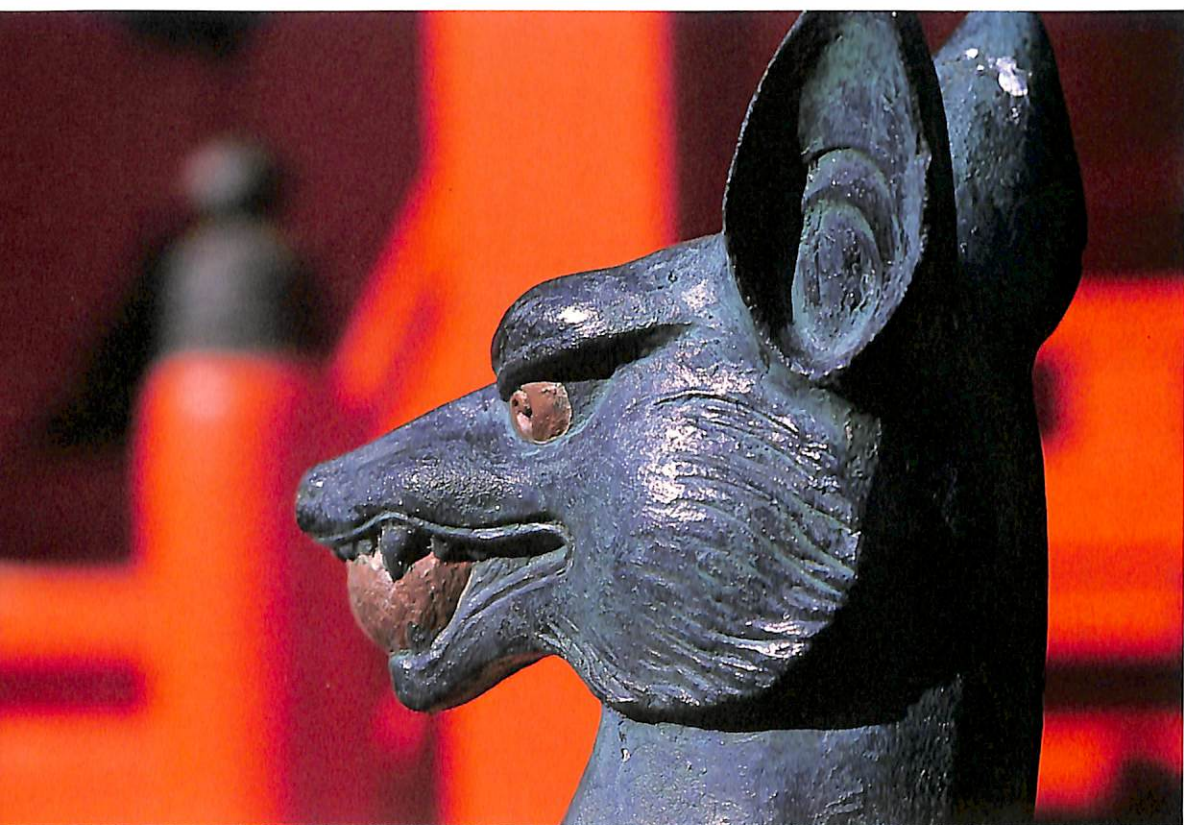
その後神田明神自体は現在の神田に移り、柴崎村の旧地はそのまま将門の首塚として残された。江戸城から見ると、神田明神は北東鬼門、日枝神社は南西裏鬼門にあたり、それぞれ江戸を邪霊から護る霊的なバリアとなった。

しかし明治に入って、朝敵将門を祀る神社はけしからんということになり、明治政府による将門崇拝弾圧が開始された。ここに将門の祟りがふたたび発現し、首塚に建てられた大蔵省では、これを壊そうとした高官や大工が次々に死んだり、不審火が出たり、という怪異が起るようになった。おかげで今日まで、ビル建設ラッシュの中心部にある首塚は保存され、周辺の大企業が慰霊祭までとり行なう「別格の聖地」になっている。

江戸がたしかに怨霊を集めた聖地だと感じるのは、将門はじめ朝廷に反逆した英雄の社が多いためである。本所向島にある牛島神社も、スサノオノミコトを祀るが、別名丑御前社ともいわれるとおり反逆者「丑御前」との縁が深い。丑御前の物語は古浄瑠璃を通じて有名だ。鬼のような姿に生まれたため父の多田満仲に棄てられた丑御前が、武蔵の国に怨霊と鬼の王国を築くが、兄源頼光の率いる四天王と闘って奮死する。牛島神社はその丑御前を祀ったというのだ。

もっとも、牛島神社に祀られるスサノオノミコトにしてからすでに反逆児であった。スサノオは牛頭天王（あるいは単に天王）ともいわれて、荒ぶる力をもち疫病を退治する神と崇められた。牛頭天王が祇園精舎の守護神だったことから出た神話だが、いずれにしても疫病や飢饉は怨霊の祟りだとされた古代にあっては、むしろ怨霊自身や反逆の英雄を鎮める営みの方が重要だったのだろう。東京に祟り神が多いのは、裏を返せば、それだけ人々の生活が貧しく困難であったことにもなる。繁栄しすぎた東京が、かつてのように祟りに遭わぬよう心すべき問題かもしれない。

（あらまた・ひろし 著述家）



神社仏閣の空間演出の仕掛けをさぐる

大江 昭

おさい銭を投げ、かしわ手を打ったらしばし手を合わせ一礼して終る。これは正月ともなれば誰もが目にし、体験する一連の所作なのであるが、実はその前後のプロセスの様々な空間体験が存在することを見逃がすわけにはいかない。そこが神社であれば鳥居を、寺ならば山門を必ずすぐるはずであり、参道の数秒利を踏む時のあの独特な響きと感触。石段を登りながら、あるいはいくつかの折れ曲がりを経て、目ざす場所はいかに予感から実像へと変化した、ついにそこへ到達することとなる。空間演出と呼んでも、アプローチの手順と名付けてもよいが、そこには様々な神経の使いようがうかがい知れる。

多種多様な意味の集積

天地開闢の昔から、今日に至るまで、神社仏閣は人々が訪れるための空間であることに変わりはなく、その迎え入れ方、招き入れ方に永年の歴史を持ち続けている。その招き入れの仕掛けを空間的に解明しようと、そこにひとたび足を踏み入れれば、その奥は広く深い。

そもそも、神社仏閣と聞けば、そのひびきから派生するイメージ自体多様な広がりを見せ、まして実際にその空間に身を置くとすれば具体的に招き入れの仕掛けとしてのモノの部分と抽象化されたイメージの部分とが交錯して、その境い目が判然とせず、これを一つの空間として規定することの困難さにそこかしこでつき当たる。しかし、実はこのことに、最も神社仏閣の空間の持つ特質が示されているように思われる。つまりそれはあたかも「都市」の空間の特質と類似して、さまざまな時期の、

さまざまな人々の、さまざまな意志による建設と変更の集積の上に成り立っているという特質に他ならない。

遠大なる空間「日光」

そこでまず思い起こされるのが「日光」の空間である。この壮大な空間を構成している要素はモノとしての側面においても、時間としての側面においても遠大な広がりを持つ。日光、例幣使、会津西の三街道合わせて二九kmにわたって立ち並ぶ杉並木は松平正綱が慶安元年（一六四八）まで二〇数年を要して植えたといわれる。大谷川に掛かり、ここで俗界と聖界を区切っている神橋を渡って表参道が始まる。輪王寺、東照宮、二荒山神社、大猷院へと奥に入り込むに従ってその高度を増してゆく参道。その道程は、整然と仕上げの施された切石の階段あり、ごくゆるい勾配にとどころ自然石の段を配したスロープあり、つき当って直角よりほんのわずかな鈍角に右へ折れたかと思えば、ゆるく左へ向かうといった、深い杉の木立を除けば、面的には決して広大ではない杜域に、訪れる人々にさまざまな体感と予感をもたらしつつ、時間的演出をも与えている。まさに気配の空間と呼ぶにふさわしい佇まいである。

一方「日光」の空間の壮大さを支えるその歴史に目を転じると、円錐型をなし、美しい姿を持つ男体山（二荒山）を対象とする古代山岳信仰に起源を発し、八世紀末ごろ中禅寺湖畔に勝道上人によって神宮寺が建立される。その後天台密教の影響を強く受け、嘉祥三年（八五〇年）現在の東照宮境内にあたる場所に社殿が移され、旧地に

残された本宮に対し新宮と呼ばれた。鎌倉、室町期に入るとその隆盛著しく、五〇〇に及ぶ寺坊があたりに散在していたと言われ、そのころ熊野修験道の移入により神仏混仰の性格を強める。そして日光の現在の姿を決定づけたのは、江戸幕府による一六六一年と一六三四年の大造営、大造替である。その後明治に入ってから境内の様々な造替が行われているが、現在では概ねその紆余曲折に満ちた歴史においては休眠期の様相といえよう。しかし将来いつまたその胎動を活発にするとも知れない。そんな空間に潜む霊気を発しつつわれわれの前に在る。

自然と人為が共生する空間

寺院境内の各要素を、密教的世界の各々の象徴に对照させて配置し、その空間構造を一つの世界観の現出としてとらえるデザイン哲学を我が国にもたらした「密教」の宇宙観は、日光に限らず数々の神社仏閣に、空間構成上の影響を多大に及ぼしているが、とくに山岳型の場合には、例外なくといってよいほどそれが顕著である。そして、そこからは必ず自然と人為との共生が読みとれる。同じ自然との共生でも、山ではなく海、川、池といった水との、言い方をかえれば水によってその空間の輝きが限りなく増幅されている神社仏閣の多くの例もあり、あまりにもよく知られているが、厳島神社、伊勢神宮、金閣寺、宇治平等院鳳凰堂などがその筆頭にあげられよう。

このような自然の恩恵と人間の敬意の高まりとの共生の関係、あるいはまたそれへの願望の上に成り立っている。

た神社仏閣の空間演出の在り方を、基本的流れのひとつとして指摘することができ。

しかし、その自然と人為の共生が、神社仏閣の空間に脈々と流れるものとして体感されてきても、それを支えてきた様式、技法の究明、特に境内の空間構成、配置に焦点を絞っての理論的解明ということになると、そこにはほとんど手が付けられていない状況といえる。それはおそらく空間の持つ複合度が高いことと、その要因ともなった歴史の変遷、紆余曲折の膨大な蓄積による、単一原理によらない空間構成の方法に起因しているものと思われる。ただその解明の容易ならざる点にこそ、神社仏閣がえも言われる魅力で、永年人々を引きつけて来た秘密があるともいえる。

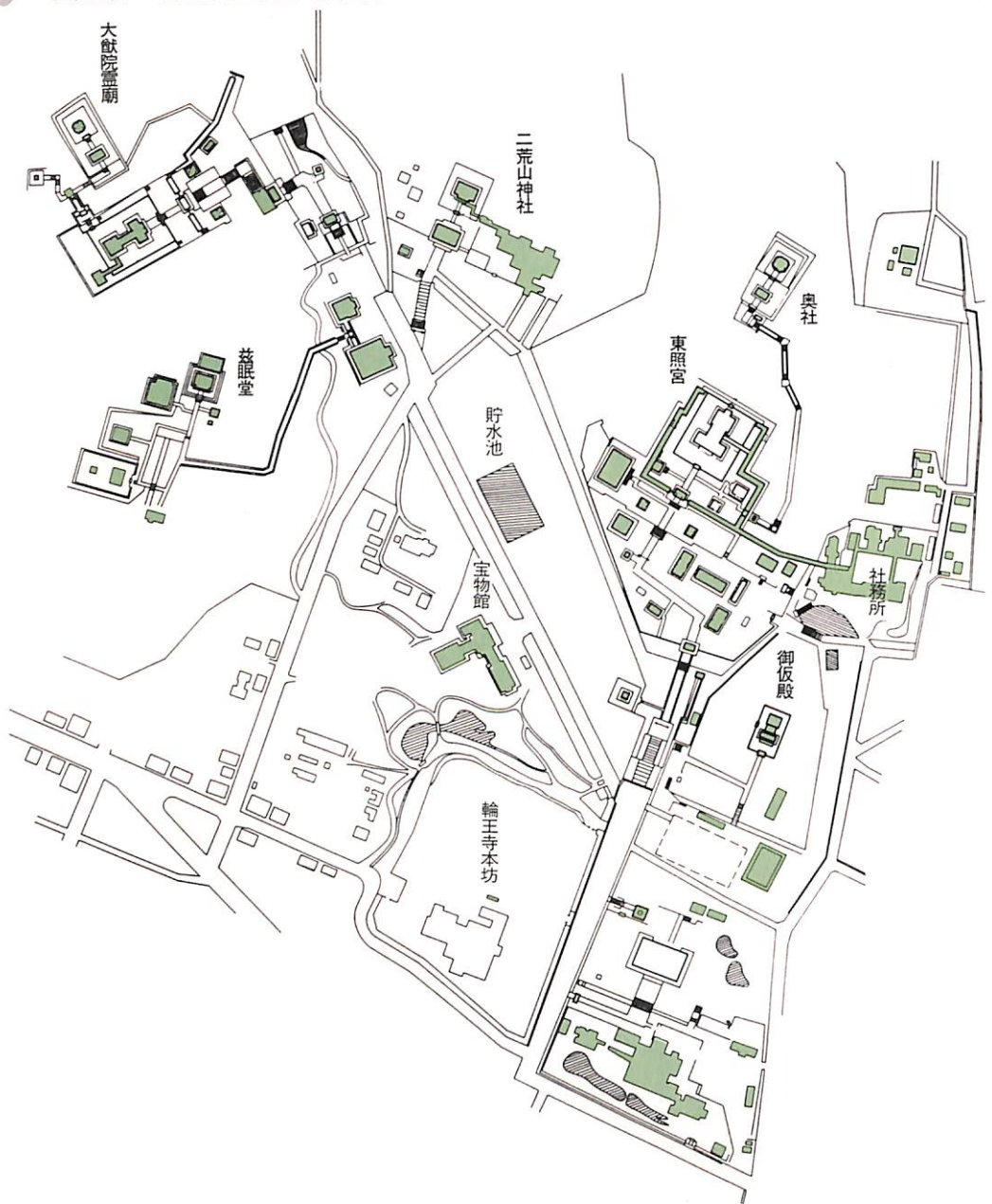
空間演出のノウハウの宝庫

都市をその構成要素の組み合わせとしていくつかのタイプに類型化できるのと同じ意味で、神社仏閣の境内の各要素建物、広場、道、鳥居、山門などの配置のしかたの類型化を試みることはできる。

たとえばさきほどの「日光」に見られるような、ひとつの動線を軸としてその上に千鳥掛けに各要素がとりついている型がまずひとつあり、その軸線は周囲の地形なりに折れ曲がりを持つている。これは密教系の空間構成の特徴で、山岳型の神社仏閣が多いため、どうしても山合、谷合いをぬって登って行く型をとることとなる。四国の通称「金毘羅さん」と呼ばれる金刀比羅宮などはそのダイナミックな例であり、奈良の室生寺などもこれに属す。

しかし同じ山岳型でも、山の中腹にあるいは山頂付近に比較的平坦な敷地を持っていたり、造り出したりしてそこを境内地とする型がもうひとつあり、比叡山延暦寺、

●東照宮・二荒山神社・輪王寺配置図



高野山金剛峯寺などその例であるが、清水寺などは往路と復路が別々になっていて回遊形式をとっている。次に主として禅宗系の特色となっている型として、境内の伽藍が一直線上に配列される形式があり、建長寺などその典型であるが、同じ鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮もそれに

近い。

さらに、この禅宗型を基本に持ちながら結果的にさまざまな変化を創り出している型。つまり境内の中にたくさん塔頭（たうとう）を持つ大規模な寺院などに見られる複合型のもので、小さな境内が幾つも集って複合的な大



聖なる空間と俗なる空間を分ける鳥居。
(東京・日枝神社)



玉砂利が敷きつめられた、折れ曲がりのある参道。
(東京・明治神宮)



期待と上昇感をかもし出す階段。
(東京・日枝神社)



本殿前の広がり強調するせまい楼門。
(東京・日枝神社)

きな境内を形成しているといった構成がある。したがってこの場合基本となる伽藍（七堂伽藍などという）の配置は厳格に一直線上にのっているが、それをとり囲むようにして広がる塔頭相互とのつなぎ部分や、となり合わせ部分などで、ふくろんだり、絞られたり、歪んだり、あるいはまたかぎのてになったりした空間を随所に創り出している。妙心寺、大徳寺、東福寺、南禅寺など圧倒的に禅宗系の大寺院が多い。都市の構成の系譜に照合し

てながめれば、これが一番現代都市につながる要素を持つものともいえようか。
これら非常に大雑把な分類を試みた訳であるが、もちろん大変不完全なのである。しかもこれらの分類からは、空間の持つ気配とか、自然と人為の共生といった神社仏閣の空間の核心に迫り切るには、はなはだ不十分である感を否めない。それは前にも触れた通り、神社仏閣の空間は、それが創出されて来たプロセスの中に、さまざま

な原理の相互貫入や、たび重なる紆余曲折をくぐりぬけて来た膨大な歴史を孕んでいることに拠るもので、そうやすやすとはわれわれに解明の手をさしのべてはくれない。しかしそこが今後とも永久に続く空間創りの営みに多大な示唆をもたらしてくれる、さまざまな叡知の宝庫であることに間違いはあるまい。
(おおえ・あきら 大江宏建築設計事務所)

社寺建築の見方

三浦正幸

現在、国宝や重要文化財に指定されている社寺建築は二千余棟に及び、ちよつと観光旅行にでかければ優れた古建築に必ず出会うものである。そうした際に、その建築の特色について説明を聞いたり、パンフレットで読んだりする。そこで古建築の基本的な解説をしよう。

●屋根の見方

社寺建築の基本的な形式は、屋根の形で表されることが多い。寺院建築では、入母屋（イロモヤ）造、寄棟（ヨセムネ）造、宝形（ホウギヨウ）造、切妻（キリヅメ）造、の屋根形式がある。十円硬貨を出して、そこに刻まれた平等院鳳凰堂の図を見ていただきたい。中央上層部の屋根が入母屋造、左右両端の上層部が宝形造でその下が切妻造である。なお、寄棟造は宝形造を横に引き伸ばしたような形である。

日本の古建築は屋根の曲線が優美であり、その形状は建築全体の美観を左右するものであるが、寺院建築を鑑賞する際にはその屋根が何造であろうと、さほど気にする必要はないし、また屋根は後世の改造を受けやすく、現在の屋根形式にこだわることは無意味なことが少なくない。

一方、神社本殿の形式についても主として屋根の形によって分類されていると言ってもよいが、寺院に比べるとその種類は多い。代表的なものを挙げると、神明（シンメイ）造、大社（タイシヤ）造、流子ガレ造、春日（カスガ）造、入母屋造などがある。神明造は伊勢神宮に代表される形式であって、切妻造の平入（ヒライリ、棟に直交して

入口を設ける）の本殿であり、両側面に棟持柱（ムナモチバシラ）と呼ばれる柱を立てて棟を支えるのが特色である。大社造は出雲大社に代表される形式であって切妻造の妻入（ツマイリ、棟の方向に入口がある）であり、やはり棟持柱がある。流造は切妻造、平入の屋根の前方部を長く伸ばして、への字形の屋根とした形式であって、神社本殿の形式としては最も多い。春日造は春日大社に代表される形式であって、切妻造、妻入の本殿の正面に庇を付けたものである。そのほかに神社本殿の形式としては、日吉（ヒエ）造、八幡（ハチマン）造、住吉（スミヨシ）造、吉備津（キビツ）造、祇園（ギオン）造など、筆者の知るだけでも二十余の形式名（ただし、学術的には現在ではあまり使われないものも少なくない）があるが、それぞれの形式ごとに一例が多くても数例の神社があるだけで、そうした特殊な形式の神社に出会った時に、なるほどと思つて下さればよい。なお、神社には権現（ゴンゲン）造という名称があるが、これは本殿と拝殿とを並べて、その中間を石の間（幣殿などと呼ぶこともある）で連結したものであって、上から見るとエの字形となった社殿である。日光東照宮がその代表例である。

●仏堂の見方

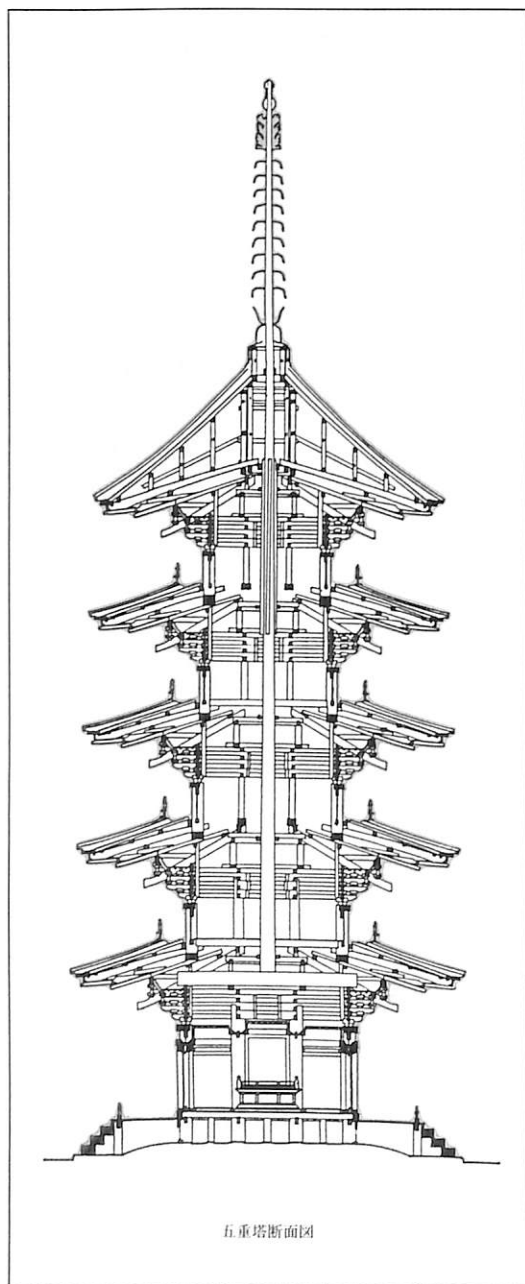
法隆寺や唐招提寺などの古代寺院には金堂（コンドウ）や講堂（コウドウ）などがあるが、こうした堂は基本的に内部は土間の一室であって、中央に仏像を安置する壇が設けられている。一方、真言宗や天台宗の寺院の本堂（密教本堂）は、大まかに言えば一室から成り、仏像

を安置する内陣（ナイジン）と、その手前の礼拝場所となつて外陣（ゲジン）とに分かれ、内陣と外陣の境は格子戸などで仕切られているのが特徴である。密教本堂は、例外も多少あるが、一般に内部には床が張つてある。また、禅宗寺院の仏殿となると、内部を一室の土間とし、後述するような唐様という様式を用いた華麗な手法が用いられている。その他の宗派の本堂は、密教本堂に類似して内陣と外陣などから成るものが多いが、宗派ごとにそれぞれ特色のある平面を持った本堂が建てられている。中でも浄土真宗の本堂は著しく広い畳敷の外陣に特色がある。寺院の仏堂を鑑賞する時には、このような特色に注意されると、一層に興味が深まると思う。

●塔の見方

ところで寺院で最も目立つのは塔であろう。塔は正しくは塔婆（トウバ）と言い、梵語のストウパの音訳である。塔は古くは仏舎利を奉安するための建築であつたが、後世になると寺院の格を示す意味合いが強くなり、また、仏舎利を奉安せずに仏像を安置するようになる。塔には三重塔、五重塔があり、かつては七重塔や九重塔もあつて高さ一〇〇mに達するものが存在した。四重塔や六重塔など偶数のものは存在しない。裳階（モコシ）と呼ばれる、いわば下屋の屋根がついたために四重や六重に見える塔があるが、構造的にはそれらは三重塔や五重塔の変形である。多宝塔（タホウトウ）と呼ばれる二重の塔もあるが、これは下層部が正方形、上層部が円形となつており、下層部の屋根は裳階から発展したものである。な

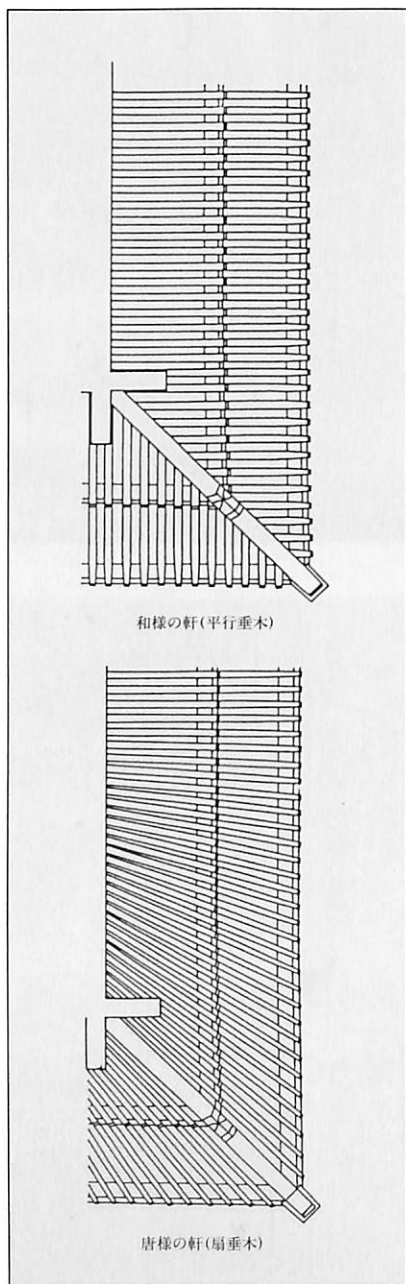
ために中国から新たに移入された様式であり、天竺様は



五重塔断面図

●様式の見方

社寺建築の様式には、和様(ワヨウ)、唐様(カラヨウ)、最近では禅宗様とよぶことが多くなった、天竺様(テンジクヨウ)、最近は大仏様と呼ぶことが多くなったが、ほとんどの人はダイブツサマと誤読するようである)の三様式があり、これらの混合したものを折衷様(セツチュウヨウ)と称している。大雑把に言えば唐様は禅宗の仏殿に多く、折衷様は密教本堂に多い。和様は塔や門に多い。天竺様は東大寺南大門など極めて少数の建築にしか見られない。そもそも唐様は鎌倉時代後期に禅宗の仏殿を建てるために中国から新たに移入された様式であり、天竺様は



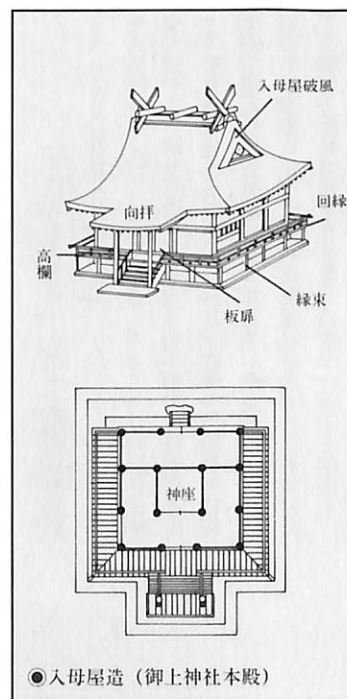
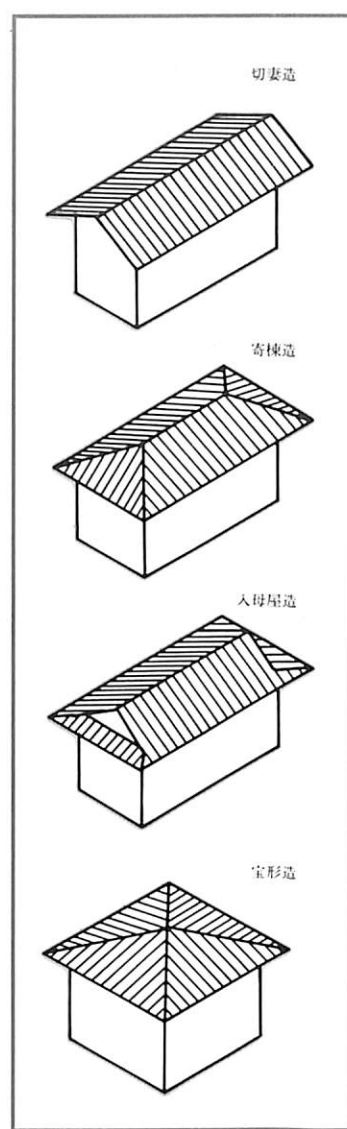
唐様の軒(扇垂木)

●門の見方

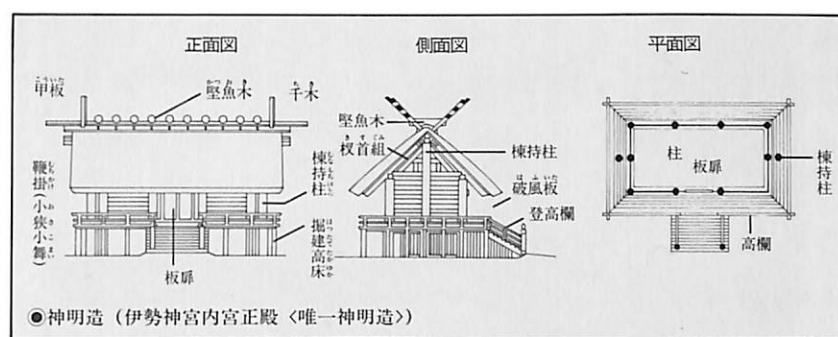
お、塔は何重であれ、一般的には一階建の建築であって、二重以上の部分は内部が作られてなく、人が入るようになっていない。

焼失した東大寺大仏殿を再建するために鎌倉初期に中国南部から移入された様式である。これら二様式の移入以前からあった社寺建築の様式が和様である。和様にしても元来は中国から伝えられた建築様式であるが、長い間、日本国内で洗練を受けて日本的な感じとなっている。そ

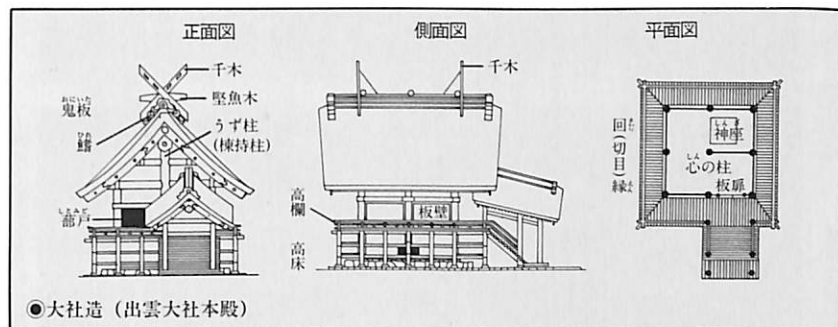
れに対して、新たに移入された二様式は異国的な感じが強いと言えよう。なお、これら三様式には、それぞれに決まった細部手法が多くあり、それらを知って古建築を鑑賞すると興味深いのであるが、紙幅の関係で今回は割愛した。(みづら・まさゆき 広島大学工学部助手)



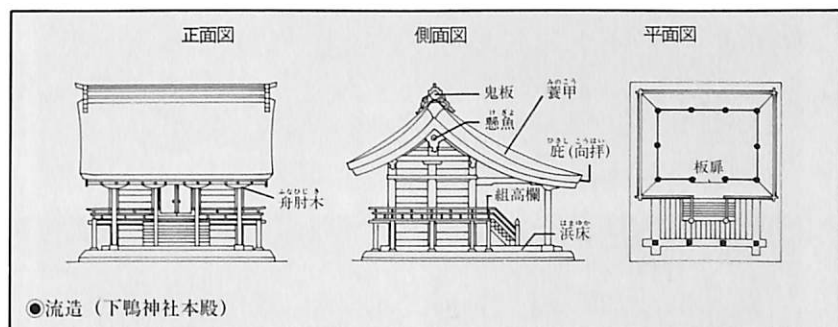
●入母屋造 (御上神社本殿)



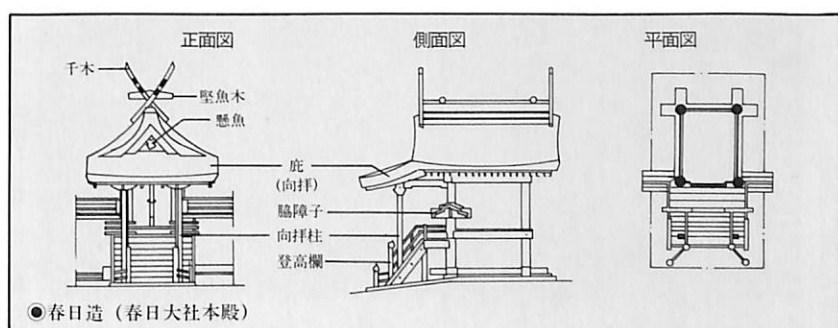
●神明造 (伊勢神宮内宮正殿 <唯一神明造>)



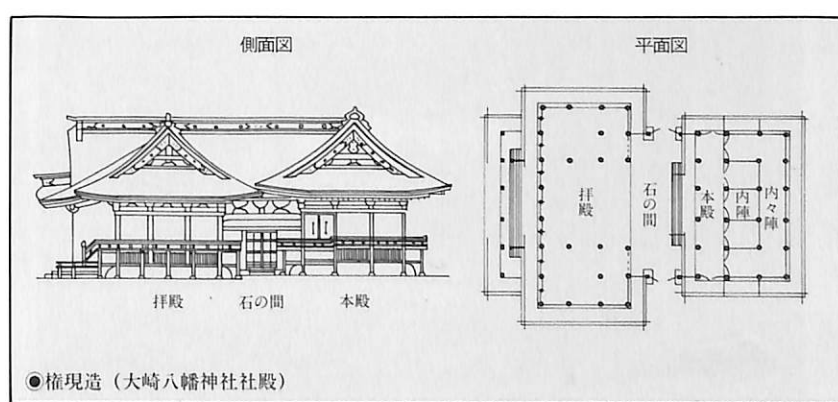
●大社造 (出雲大社本殿)



●流造 (下鴨神社本殿)



●春日造 (春日大社本殿)

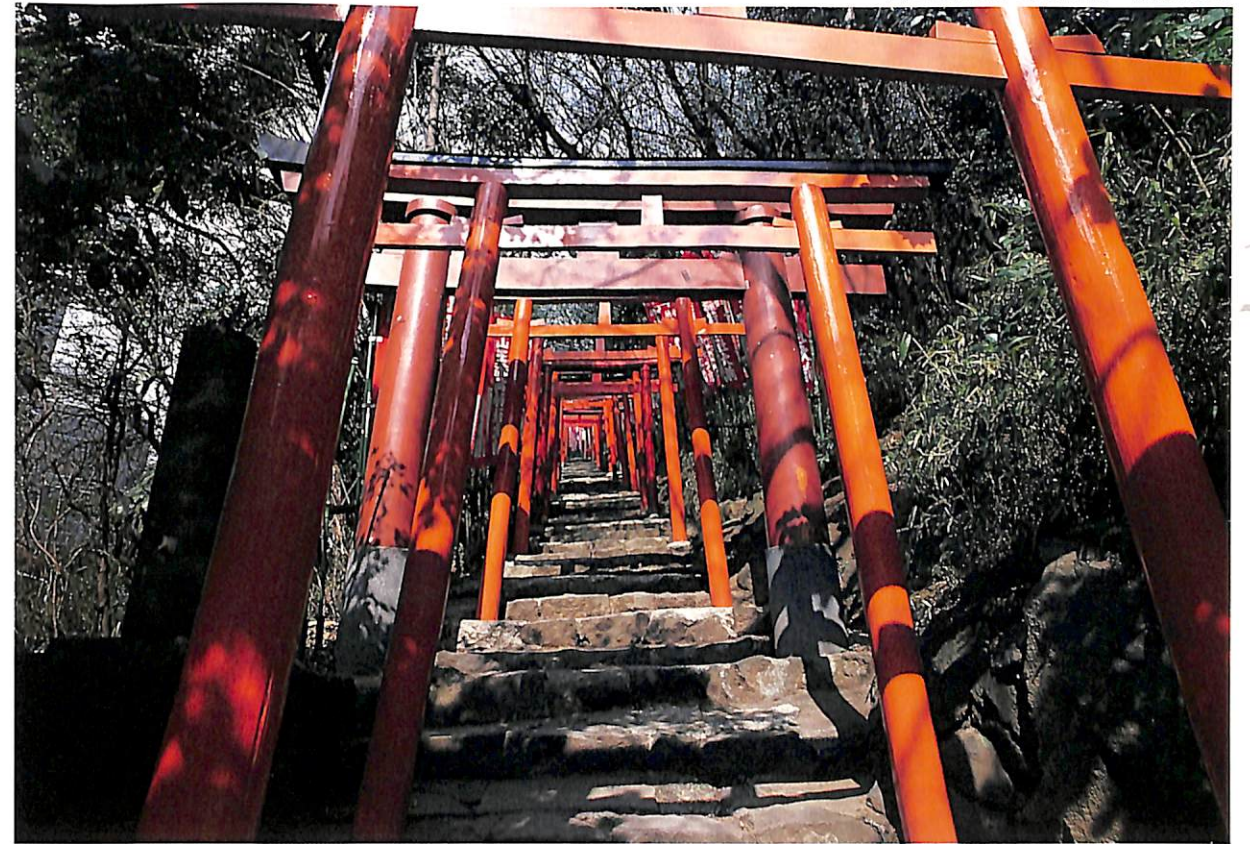


●権現造 (大崎八幡神社社殿)

いま、神社空間に求められるもの

上田 篤

山王稲荷神社の参道(東京・日枝神社内)



心をもったひとつの理由なのです。またもうひとつ、大都市の中の神社というのは無残な状態になるものが多いのですが、ちよつと田舎の古いたたずまいの神社を見ると、参道というのかかつてのままの状態に残っていて、これが大変面白い。いったい誰がこういうものを設計したのだろうか。そういう点にも興味があつて神社について少し考えてみる気になったのです。

アニミズム・政治的シンボル・産業神

それで、神社の歴史を少し調べてみたのですが、面白いことに神社というのは時代によって非常に意味が変わってきているんですね。どういうことかという点で最初の頃は、たとえば縄文時代のようにまだ日本という国と中国や朝鮮半島の国々との間に本格的な文物の交流のなかった時代には、神社というものはおそらく小さな集団社会における一種の宗教というか、アニミズムの形として存在していたと思うのです。アニミズムというのは、森や、山の上、あるいは山全体が神様であつたりするわけですから、社というものはなくともいい。ある聖なる木(神樹)が神様の依代であつたりする程度で、神を祀る建物はいらないわけです。

ところが、中国や朝鮮といった大陸の国々との交渉が非常に繁くなった六世紀ぐらいを境に大きな変化が出てくるのです。というのは、大陸の争乱を逃れて朝鮮半島から大量の亡命者が日本へやってくるのがこの時代ですが、そのさい、文字をはじめとする様々な文化が日本へ入ってくる。そのなかに仏教というものがあつた。仏教にはお経とか哲学とかいろいろむづかしいところがあるけれども、一般の人はそんなことより立派な建築物がつくられるというのに驚嘆したのです。それが法隆寺であり、四天王寺であつたわけですね。それまではいわばア

ニミズム世界で、それこそ一本の木の回りに集つて、神鎮めなどをやっていたわけですが、一方で立派なお寺が建てられる、それでびつくりする。

仏教の輸入によっておそらく日本は大揺れに揺れたと思うのです。新しい仏教を奉ずる新興勢力と従来の土俗的な宗教勢力との間で、様々な葛藤があつたことはいろいろ語られているわけですが、その時に従来の勢力、たとえば物部氏が仏教に対抗して、あるひとつの神を奉ずるようになる。一地方のアニミズム的な信仰中心だったものが、政治的なひとつのシンボルになるわけです。その結果として社がつくられるようになる。それが変化のひとつですが、もうひとつ見逃せないのが産業とのむすびつきです。日本人は、文物の渡来と亡命者の流入によって、自らの生活を守るために先進的な技術や産業というものを身につけざるを得ない状況に立たされたと考えられます。政治的に対抗しようとしても強大な仏教勢力に対しては限界がある。軍事的にも「物部戦争」のように敗れる。そこで産業を興していこうとしたわけですね。しかしその技術や産業というのはなにかというと、ように朝鮮半島から渡来した文物をつくる技術を習い、つたことだと思ふのです。それは明治期の「和魂洋才」と同じで、大陸の技術は身につけるが魂は譲らないというような形、つまり「和魂漢才」というようなことで取り入れたのだから。

そこでなにか起こつたかという点、技術集団です。日本人は技術を身につけるいろいろな集団に分化していった。たとえば、馬ばかりを生産する馬飼部であるとか、須江器(陶器)ばかりをつくる土師部であるとか、水銀を扱う丹生一族であるとかいうように分かれていったわけです。そういう技術集団の結束の中心には神がいた。技術は身につけるが魂は仏教に帰依せずに日本人は従来の神を奉じた。それで、日本の神様というのは産業神的な

私たちはきわめて現代的な生活を日々送っているのに、子供が生まれたら「御七夜」に神様にお詣りをし、正月になれば神社に参詣します。あるいは、子供の七五三詣で、受験、また交通安全を祈願したりするというように、現代都市のなかで生活しているながら、時々神社へ出かけていきます。わたしはこれは大変不思議なことだと思ふのです。ヨーロッパ人のようにキリスト教を信じ、神を信じ、日曜日ごとに教会に参るといふのであれば話は分るのですが、日本人の場合は大部分が無神論的だからです。

また、これだけ現代文明が発達し、大都市化が進んでいるながら、神社が街のどこどこにある。たとえば東海道新幹線に乗って車窓を眺めているといつも感じます。車窓から眺める風景というのはほとんど同じ。家々が密集して並んでいたり、プレハブの住宅がたかさん建つていたり、工場があつたりというように、風景にあまり変化がない。けれどもその単調な風景のなかにポコッポコッと緑が残っている。盛り上がるようにして残っている。その緑というのはよくみると分るのですが、たいして鎮守の森なのです。周囲の住宅地に浸蝕されて、ほんのわずかに命脈を保っているような形になっているけれども、かろうじて残っている。これもまた大変不思議なことですが、他の国を見るとそんなに古いものは残っていない。残っている場合には、必ずなにか現代の社会的な存在理由がある。ヨーロッパの古い教会にしても毎日が参りするという実際の意味があるわけです。ところが日本の場合は神社は一年に一度か二度時々生活のなかに現れてくる程度で、日常ほとんど消えてしまっている。それなのにこんなにたくさん神社が残っているというのも、また不思議だと思ふのです。

いったいどうしてこういうものが残っているのだろうか、それを知りたかつたというのが、わたしが神社に関



東京・浅草寺

性格を帯びていくのです。たとえば、三輪神社は酒の神様であり、八幡様は鉄の神様でありお稲荷さんは米の神様であり、水分神社は水の神様である、というように全部産業的に変貌していったのです。つまり、元来素朴なアニミズム信仰であったものが、大陸との接触によって産業神になった。これは仏教やキリスト教など大いに異なるところです。仏教の各分派集団には、法相宗がなかの産業で、華嚴宗がなかの産業で、というようなことはない。それらの主旨の違いは魂の救済に関する、もつと精神的なものなんです。ところが日本の八百萬の神様は産業神に化けるという形で生き延びた、というか甦った。それがだいたいい七世紀以後の歴史です。

しかし、貴族を中心とする上層の社会では精神的には仏教に帰依していた。インテリがマルクス主義にかかわるのと同じく似ています。ところが、庶民は産業神、つまり日本の神様を拠り所にするという一種の社会の二重構造が二世紀まで続いてきたのです。

ムラを守る鎮守神

ところが、一二世紀に鎌倉政権ができて、今度は貴族体制にガタがくる。同時に仏教もガタがくる。そこで真宗や浄土宗などの大衆仏教が起きてくる。鎌倉仏教は現世の救済という意味で神道などと似かよったものなのです。そして貴族制度というピラミッド的な階級社会が崩れるわけです。そこで日本社会はどうなるかというところ、各村ごとに自治権をもち、武装するようなムラ社会が生まれる。惣村といわれるものです。丸山真男が言うところの「タコツボ的社会」になるわけです。このムラ社会は明治維新にも変ることなく、さらに第二次大戦を経験した後までずっと続くことになる。今日の社会でも「三菱ムラ」があり、「三井ムラ」があり、「住友ムラ」がある

いと思うのです。

環境神の時代

ところが、ここで問題になるのは、じつはそうした長期にわたって生き続けたムラ社会が、今や崩壊に向かいつつあるという事態を迎えたということなのです。これは大変重要な問題です。日本社会は時代のひとつの大きな節目にさしかかったということです。それはどういうことかと言うと、ムラ社会というのは、ようするに貧しさから身を守るための結束である。貧しくなりたくないという気持ちから生れてきたものだろうと思うのです。そういう気持ちからコミュニティ的な結束が生れ、それがムラ社会成立の基盤になった。そういう状況というのはついに一〇年前まで、現実問題としてあったわけなんです。明日のメシが食えるかという悩みが、ついこの間まではあった。特に農村にはあった。ひとつの例を出せば集団就職というのがある。農家の次男三男というのは、どうしても家に置いておけないから、そこで「金の卵」とおだてられて家から放り出されたわけです。表面的には「金の卵」でも、じつはいわゆる棄民だった。表現はよくないかもしれないが、農家は子供を都会へ捨てたんです。そういう状況が昭和四〇年か四五ぐらいまで続いたと思う。

ところが、農村における貧しさというのがこのころを境になくなっていくのです。つまり高度成長経済を経て日本は豊かになっていった。社会が永続的な物質的基盤を確立するようになるのです。そうなるかどうかという点、ムラの意味がだんだんなくなっていくわけですから、豊かな物質的な基礎を前提として、情報や飛びかう時代になると、もはや鎮守神というシンボリックな要素はいらなくなってくる。そういうなかで、神社はいっ

というように、人々はたいていどこかのムラに帰属している。必ずどこかのムラに帰属し、ムラの一員になるという面は今でもみなもっているわけです。

一種のムラ社会ですね。これは一三世紀に国家によって実質的に承認されるわけです。貞永式目がそれです。そういう社会の大きな変化のなかで、神社は産業神から、今度は鎮守神になるのです。

これはものすごい変化です。鎌倉、室町の頃は、新しい村がつくられるときに必ずどこかの神社を勧請して置きます。つまり分神を持つてくるのです。その神社の前でムラ・コミュニティの結束を誓う。そして神社に置文といういわば村の取り決めを一種の憲法として奉納する。もしもそれを犯した場合は村八分にすると、そういう制度ができていく。つまり、神様はムラ・コミュニティの結束のシンボル、核になっていくわけです。そういう形で神社は産業神から、鎮守神へ衣替えするのです。

たとえば、新しい村が開発されると、開発者の間では上下の階級性をつくらず、村長のような役割も輪番制にする。一種の民主主義が行なわれる。そしてその村の中には誰も立ち入ってはならない聖なる部分を設ける。それが入会山であり、鎮守の森なのです。つまり個人が私有しない部分を聖なるものとしてみんなて守りあう。それが山であり、その山のシンボルとして鎮守神を置く。その入会山というのは、草や木などの生産地ですが、飢饉になったときには山の実を提供する場所でもある。鎮守神の置かれた山は単なるコミュニティのシンボルであるばかりではなく、物質的な基盤でもあったわけです。それで日本の村社会は八百年生き延びてきた。たとえば幕府の時代に老中、大老という制度がありました。これらは村のなかで村をコントロールする大人や老中という役割がそのまま形を変えて残ったものです。また幕府の將軍というのは、全く鎮守神みたいなものです。江戸

ないどうなるか、これは大変興味のある問題です。

ところで、そういう時代と社会の変化のなかでもうひとつ見逃せないことは、心の問題ではないかと思えます。今若い人たちの間で人気のある作家に村上春樹という人がいますね。あるいは映画「さびしんぼ」をつづいた大林宣彦という人がいますが、彼らの作品に共通しているものはなにかというと、非常にファンタスティックな世界という事です。ちょっとメルヘンみたいなところがある。若い人たちは物質的にきわめて豊かで、それこそブランド商品を追い求めていくところがあるのですが、同時に気持ちとしては童心に帰るといえるか、夢と現実が一緒になっていたところの子供の心を求めているという面がある。物質主義、あるいはエコノミックアニマルといわれた現代日本の大人たちに対して、もうひとつ別の新しい潮流が出てきたと思うのです。

そう考えてみると、鎮守神としての役割は消えてしまいかもしれないが、全く別の空間として神社が見えおさる可能性がでてくるのではないかとわたしは思うのです。というのは、心のありかを求めるという時代に入りつつあるなかで、気分よさ、居心地よさという面で鎮守神のある森というものが、センスのいい、カッコイイ空間になるということはあるだろう、と思うのです。原宿や六本木と同じレベルで、またファッション性の高いシテイホテルと同じような場所として、鎮守の森を見直すことはできるだろうということ。たとえば、今若い女性のあいだで温泉が復活していますね。特に露天風呂のように、大自然の中で裸になるあのなんともいえない雰囲気よさ、気分よさが見直されている。なにか魂と自然とが接するような「交感」があると思うのです。そういう感覚と同列のものとして鎮守の森というものが見直されてくる可能性がある。ただその場合、それだけの雰囲気をもった空間でなけ



住宅地(杉並区)にある鎮守神、田端神社

城の大奥に囲まれて、実質的にはなにもしなくていい。実際の権限は老中が取り仕切っているわけです。それが明治以後、今度は天皇が將軍の役を引き継ぐ。つまり天皇というのはある意味で日本という全体の社会の鎮守神なのです。そして、宮城というのはまさに鎮守の森なのです。

このムラ社会の構造はくり返すようですが、今まで生き続けてきた。そこでもう一度最初に述べたことにもどると、単に御七夜があったり正月があったりするから神社が存在するのではどうやら足りない。ようするに現代にもなおムラ社会が存在するから鎮守神が必要になってくる。神社の存在は、日本の社会のしくみと深く関わってきているのです。とりわけ鎮守神の時代になって、それはひとつのシンボル機能として重要な役割を担ってきた。その結果、神社が今でも残っていると考えられるのです。

大きな神社は神社庁を通して天皇制と深く関わっている。またたとえば、大きな会社には、必ずといっていいくらいどこかに神棚や神社が祀られている。屋上にお稲荷さんがあったりする。経営者というのはいまも神道に共鳴するところがある。このように日本の神社の存在というのは、日本の社会と絡めて考えてみなければならな

ればダメです。コンクリートの社殿が建っていて、木が二―三本パラパラとある程度というところはまだしも誰もいなくなるでしょう。やはり空間のデザインということが重要になる。温泉でもそうです。ネオンサインのケバケバしいビルのマンションのようなくところへ行くわけがない。やっぱり木造のひなびたところへ行くわけです。最近の女性は、それと同様に、そういう雰囲気をもったところをなければダメなのです。とはいえそれは大きな問題ではない。明治神宮や住吉大社のような大きなところであろうと、また地域のコミュニティのなかでかろうじて存在しているような稲荷神社であろうと差はない。ようするにそういう雰囲気をもった空間力のある場所ならいいと思うのです。やはりこれはデザインの問題でしょう。つまり鎮守神はいまや環境神になってくるわけです。

以上お話ししてきたように、歴史的に追ってみると、神社というのはその時代時代によって役割が変わってきた。けれども、それではアニミズムというものはなくなったのかというと、やっぱりそういう原風景というふうなものに残っているのです。ですから、アニミズム、産業神、鎮守神、環境神というのは互いに重なりあひながらその比重が変ってきたといったほうが正確かもしれません。

国士がこれほど近代化されても、なおまだ七〇%の山はほとんど手つかずに残されている、これは非常に大事なことだと思ふのです。都市のなかにある鎮守神を大切にすることも必要ですが、この山地をどう保存するかは今後の大きな課題です。山そのものがひとつの鎮守の森といえるわけですから。しかも最近では温泉を含めて人間と大自然の交感の場として見直されつつあるところですから、これは大事にしなくてはいいけない。以上のことはつけ加えておきたいと思ふます。

(うえた・あつし 大阪大学教授)

●巡礼のおこり

霊場・聖地等を廻る巡礼という宗教行為は、仏教が日本に輸入される以前から日本固有の民族信仰として浸透していたものである。その芽は、古来よりの山岳信仰にもとづく山伏・修験道にもみることができ、八世紀に津令制度が確立し、諸国に国分寺、国分尼寺が置かれる頃になると、持経者または持経聖、のちに六十六部廻国聖あるいは六部さんと呼ばれる庶民宗教者たちが、法華経を日本六十六ヶ国の一の宮に奉納することを目的として全国を遊行放浪する、一種の「巡礼」という行為が行なわれるようになる。これらの巡礼信仰は、仏教が伝来して鎮護国家仏教が東大寺や薬師寺、興福寺などの壮大な伽藍に君臨すると、異端視圧迫される。しかし、巡礼という宗教行為そのものは、これら正統仏教の流れ、各神道の流れなどの宗派・教義を越えたところて民衆の心の中へ入り込んでいたのである。

六十六部宗にはじまり、弘法信仰に支えられた四国八十八ヶ所巡り、観音信仰に基づく西国三十三ヶ所巡り、西国、坂東、秩父百ヶ所巡りへと流れる巡礼信仰は、江戸中期に爆発的な流行をもたらし、とくに関東、東北に数多くの巡礼霊場が開設され、ついには日本全土へ広がっていった。この頃になると、巡礼空間―非日常的空間がしだいに生活空間―日常的空間との距離を縮め、巡礼信

仰の庶民信仰としての確立がなされ、江戸庶民文化の成果の一つとなるのである。

●新四国相馬霊場八十八ヶ所

新四国相馬霊場八十八ヶ所は、江戸浅草より取手宿で呉服屋として独立した商人伊勢屋源六、僧侶観音堂大禪師により安永四年（一七七五）に開基された。源六は信仰心が厚く、当時荒廃著しい長神寺境内の観音堂の修復をきっかけに、弘法大師によって広められた観音信仰ということ、大師信仰の霊場を設けることが人心の信仰心と取手宿の賑わいを合一させる道であると考え、自ら高野山を参拝し、四国に赴き八十八ヶ所の霊場を巡り来て、取手宿を中心とした新四国相馬霊場八十八ヶ所を開基するに至るのである。

当時の取手宿は、江戸からちょうどよい距離（二日で行ける距離）にあったので次第に参詣者が多くなり、宿場全体が活気を帯び、繁栄していった。

札所は八九番あり、利根川をはさんで茨城・千葉両県（取手市・我孫子市・柏市）―従来は一〇ヶ町村三〇部落―にまたがっており、道程は六八km（二七里で、どの地から始めても三日間で巡礼することが出来る。また順番通りに一番・二番…と巡拝する時は道程五六八km（二四二里）で我孫子市から大阪までの距離に相当し、七日間を要する。札所の位置は、本四国の霊場所在の地形と相

似した所を選んで模して設けられているが、納札堂の小堂は各村の組合により寺院や鎮守の敷地に立てられたもので、弘法大師の像が安置され、各札所には元寺から写した御詠歌がかかげられている。

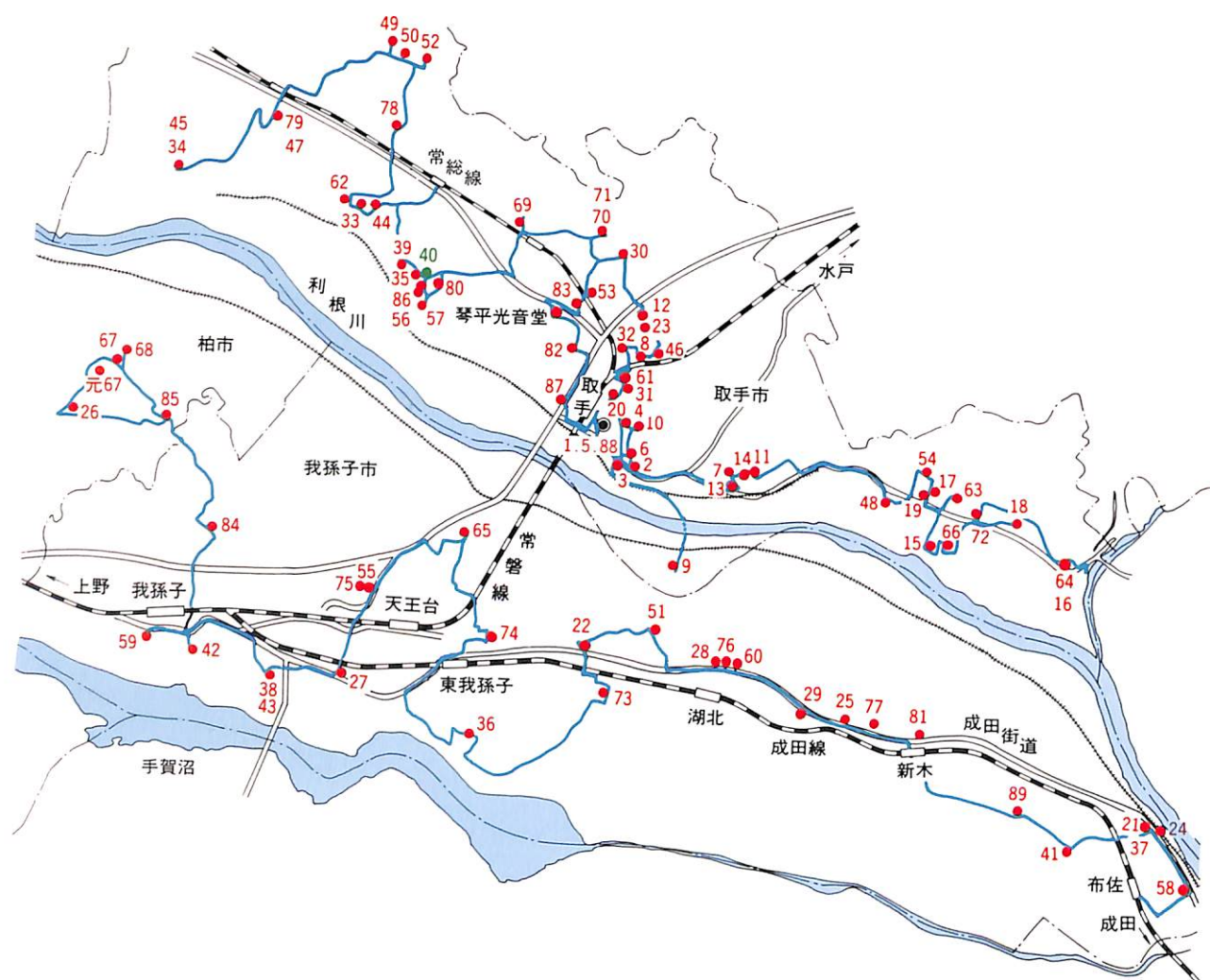
●地域の中の札所 コミュニティのためのひろばの条件

都市化の波が押しよせ、郊外住宅地としての開発が進むこの地方に今も残る巡礼のための札所―相馬霊場八十八ヶ所は、地域の中でどのように存在し、地域の住民にどのように利用されているのであろうか。八十八ヶ所のフィールドサーベイと、取手市・稲・台宿、我孫子市中峠の三集落（札所一六ヶ所三〇〇世帯へのアンケート調査の結果から、札所という限定された特殊なひろばが、集落という共同体の中でコミュニティの場として活用されるための条件としては、以下のことがあげられた。

- 1・集落の中心に位置すること。集落の中心にある札所にはコミュニティ関係の施設が多く存在していることによるが、集落の中心でも周縁でもない中途半端な位置にある札所は、コミュニティとしてのひろばの役割をもちにくい。
- 2・通り抜け可能な空間であること。とくにコミュニティ関係施設のある札所には、通り抜け可能なパターンが多いことと関連している。
- 3・ある程度の広さをもつ空間であること。消防分団

●新四国相馬八十八ヶ所

1・5・88 長禅寺	西光院	31 天神宮	47・79 三仏堂	61 大日堂	76 竜泉寺
2 念仏院	17 成竜寺	32 観音堂	48 安養寺	62 白山神社	77 弁財天
3 八坂神社	18 弥陀堂	33 長福寺	49 高源寺	63 福永寺	78 弥陀堂
4 不動院	19 地藏堂	34・45 薬師堂	50 東光寺	65 無量院	80 毘沙門堂
6 薬師堂	20 地藏堂	35 薬師堂	51 法岩院	66 東谷寺	81 長福寺
7 本泉寺	21・37 勝勝寺	36 滝前不動	52 妙音寺	67 薬師堂	82 弘経寺
8 観音堂	22 白泉寺	38・43 子の神	53 弥陀堂	元67 薬師堂跡	83 諏訪宮
9 常円寺	23 薬師堂	39 延命寺	54 大聖寺	68 布施弁天	84 宝蔵院
10 観音堂	24 延命寺	40 薬師堂	55 円福寺	69 観音堂	85 円性寺
11 薬師堂	25 地藏堂	41 薬王寺	56 地藏堂	70・71 永福寺	86 観音堂
12 虚空蔵堂	26 南竜堂	42 稲荷社	57 弥陀堂	72 大日堂	87 愛宕神社
13 加納院	27 最勝院	43 大光寺	58 観音堂	73 正泉寺	89 浅間神社
14 地藏堂	28 宝照院	44 西光寺	59 興陽寺	74 西音寺	
15 弥陀堂	29 観音寺	46 阿弥陀堂	60 照明院	75 東源寺	
16・64 観音堂	30 一乗院				



集会所など内容の充実したコミュニティ施設が設置されているのは、一〇〇坪(三三〇㎡)以上の広さをもつ札所である。

4・以上のようにひろびろがコミュニティとしての役割を果たすか否かは、コミュニティ関係の施設が存在が大きく左右している。たとえば、札所の中に集会所や店、保育園などの施設のある場合は、本来の大師詣り、墓参りなどの宗教関係の利用目的よりも、そのコミュニティ施設の利用度の方が高くなっている。

以上のような条件を満たしている札所として、取手市稲の葉王寺(四十番札所)があげられる。この札所は、まさに集落の中心ともいえるべき三叉路のところに位置し、取手駅の方に行く人は必ずこの前を通る。また通り抜け

コミュニティ施設のある札所は集落の中心に多い

施設の有無 札所の位置	コミュニティ 施設あり	コミュニティ 施設なし	計
集落の中心にある 札所	22	3	25
	88	12	100 (%)
集落の不特定な位置 にある札所	1	2	3
	33.3	66.7	100 (%)
集落の周辺部にある 札所	21	33	54
	39.9	61.1	100 (%)

注：全札所89ヶ所、所在場所82(一境内に複数の札所があるところがある)

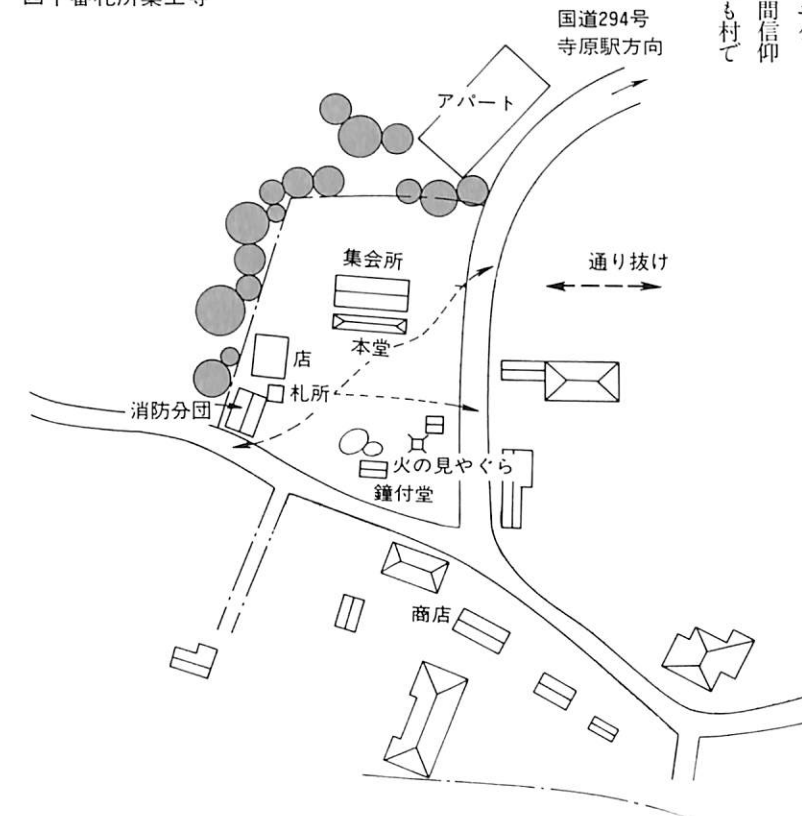
通り抜けできる札所には多くの施設がある

コミュニティ施設	消防 分団	火の 見やぐら	集 会 所	派 出 所	店	公衆 電話 ボックス	井 戸・ 水道	公衆 便 所	旧 集 会 所	遊 戯 施 設
通り抜け による分類										
通り抜けできる札所 にある施設の数	14	13	17	0	4	1	11	2	1	16
通り抜けできない札所 にある施設の数	5	4	5	1	0	0	2	0	4	6

重要なコミュニティ施設は100坪以上の札所に多い

コミュニティ施設	消防 分団	火の 見やぐら	集 会 所	派 出 所	店	公衆 電話 ボックス	井 戸・ 水道	公衆 便 所	旧 集 会 所	遊 戯 施 設
ひろばの広さ										
100坪以上の札所にある 施設の数	13	9	16	1	4	0	7	1	1	16
100坪未満の札所にある 施設の数	6	8	6	0	0	1	6	1	4	6

四十番札所葉王寺



建てたものである。新興住宅地としての開発が進む中でこのような札所を大師詣りのお遍路さんのためだけのものではなく、地域に住む人々のためのひろば、コミュニティの場として、保存、活用していくべきであろう。

(かとう・ひとみ 日本女子大学住居学助手)

※日本女子大学住居学小川研究室・昭和四十九年度卒論「新四国相馬霊場八十八ヶ所」(石井房子・石丸裕子による)。

町人の街・中央区の全神社調査

江戸の町は、徳川氏の江戸入城(一五九〇)と、ひきつづく江戸開府(一六〇三)を契機に多数の地方の人々が流入し、原野を拓き干潟を埋立ててやがて人口一〇〇万人の大都市を形成する。

とりわけ現中央区の土地の大部分は、全国諸大名のお手伝い普請による埋立てで造成され、諸国から移り住んだ商人・職人が作りあげた(一六五八「築地」完成)町人の街である。

こうした埋立ての地、町人の街・中央区の全神社を文献その他で調べあげ、ひとつひとつ踏み歩き、由緒書・縁起書をひもといてその歴史をさぐり現在をたしかめてみた。

○江戸時代初期までの創祀とされる古い神社は、京橋地区の二二社に対し日本橋地区は二二社と圧倒的に数多い。

●神社一覧表

●日本橋地区の部

番号	名 称	神社系列 神田 日枝	所 在 地
1	白旗稲荷神社	○	日本橋本石町4-4-17
2	稲荷神社(稲荷)		〃 室町2-4-9稲徳会館△
3	産千代稲荷	○	〃 室町1-16
4	両社稲荷	○	〃 本町4-9
5	稲田稲荷	○	〃 本町4-7
6	宝田神社(稲荷)	○	〃 本町3-10
7	常盤稲荷神社	○	〃 本町1-8
8	稲森神社(稲荷)		〃 堀留町1-10-2
9	出世稲荷神社		〃 堀留町1-6-12パレドールビル△
10	岩代稲荷神社		〃 堀留町1-7
11	池洲稲荷神社	○	〃 堀留町2-4-10
12	三光稲荷神社		〃 堀留町2-1-13
13	千代田神社	○	〃 小伝馬町
14	竹森稲荷	○	〃 小伝馬町19
15	稲荷神社(富沢稲荷)	○	〃 富沢町7-18
16	初音森神社(稲荷)		〃 東日本橋2-27-9初音森ビル △
17	川上稲荷神社	○	〃 2-25-4
18	矢の庫稲荷神社		〃 2-6-4
19	笠間稲荷神社		〃 日本橋浜町2-11-6
20	浜町神社(稲荷)	○	〃 浜町3-14-12
21	金刀比羅宮	○	〃 中洲11-1中洲会館△
22	高尾稲荷神社		〃 箱崎町10-7
23	稲荷神社(永久稲荷)		〃 箱崎町22-11
24	神道大教銀杏八幡宮		〃 箱崎町1-7-7
25	水天宮		〃 箱崎町2-4-1
26	松島神社(稲荷)		〃 人形町2-15-2
27	末広神社(稲荷)		〃 人形町2-25-20
28	小網神社(稲荷)		〃 小網町16-23
29	日枝神社摂社	○	〃 茅場町1-6-16
30	明徳稲荷神社	○	〃 茅場町1-6-16
31	翁稲荷	○	〃 茅場町1-6-16
32	純子稲荷	○	〃 茅場町3-13-7
33	鳥居稲荷神社	○	〃 兜町20-2
34	大原稲荷神社	○	〃 兜町11-3
35	兜神社(稲荷)		〃 兜町1-8
36	振分稲荷		〃 1-5-3西川ビル △

●京橋地区(銀座・京橋・月島)の部

番号	名 称	神社系列 神田 日枝	所 在 地
1	八官神社(穀豊稲荷神社)		銀座8-4-5 △
2	金春稲荷(森氏稲荷)	○	〃 8-6-3 △
3	成功稲荷神社		〃 7-5資生堂本社内 △
4	豊岩稲荷神社	○	〃 7-8-14
5	熊谷稲荷神社	○	〃 7-12-9
6	清澄・玉樹・伏見稲荷		〃 6-6
7	あづま稲荷神社		〃 5-9
8	宝童稲荷神社		〃 4-3-2
9	朝日稲荷神社	○	〃 3-8-10大広朝日ビル△
10	宝珠稲荷神社		〃 3-14-15
11	銀座稲荷神社		〃 2-6-5越後屋ビル △
12	幸福稲荷神社	○	〃 1-5-14
13	横三伏見稲荷神社	○	〃 八重洲2-11-5
14	出世稲荷神社		〃 2-6-16北村ビル△
15	狩野稲荷神社		〃 2-7-12K-1ビル△
16	天祖神社(伊弉大神宮)	○	〃 八丁堀3-6-6
17	今村幸稲荷神社	○	〃 3-24-11
18	日比谷稲荷神社	○	〃 3-28-15
19	稲荷神社(大栄稲荷)		〃 新川1-2-14
20	新川大神宮		〃 1-8-17
21	渡海稲荷神社		〃 1-31-4
22	金刀比羅神社		〃 2-15-14
23	於岩稲荷田宮神社		〃 2-25-11
24	鉄砲洲稲荷神社		〃 湊1-6-7
25	復興稲荷神社		〃 新富1-4-8
26	新富稲荷神社		〃 2-9-4
27	水神社		〃 築地5-2
28	波除稲荷神社		〃 6-20-37
29	住吉神社		〃 佃1-1-14
30	住吉神社御旅所		〃 勝どき4-13-6
31	住吉神社晴海分社		〃 晴海3-4-9

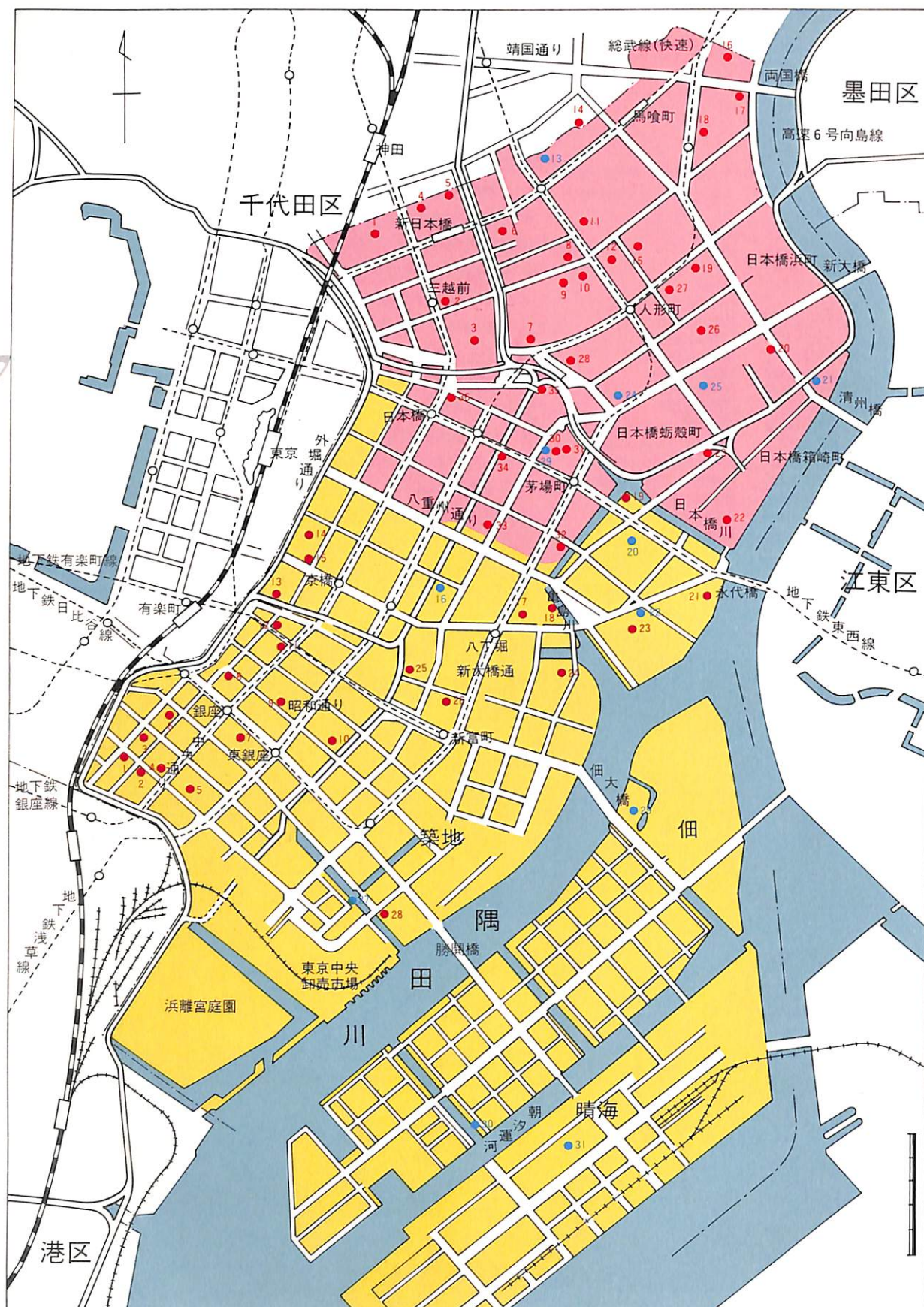
住吉神社、かつては参道が隅田川にひらかれ蔵島神社のように水辺からまっすぐ参詣できたそうだが、今や高い防潮堤に閉ざされてその面影はない。銀座「八官神社」は、一階に拝殿を、奥宮(御神体)は八階に設けるという近代建築であるが、中央区内には、このほかにもビルのなかや屋上に鎮座する神さまが「一社に及ぶ」(デパート屋上のものは調査対象から除いた)かつてのたまたまいをしのばせる神社もないではないが、時代の波はだんだんに神社の姿を変えていくようである。

(第一住宅建設協会調査)

(参考文献) 中央区内神社調査書・中央区史上巻2・江戸東京神社名集第一巻・日本橋二之部町会史・東京名所図会日本橋区・東京名所図会京橋区・中央区史蹟散歩(学生社)・中央区の歴史(名著出版)・東京の神社(昭文社)・中央区の文化財(四)

注1：所在地欄△印はビル内または屋上にあるもの
注2：デパート屋上のものは対象から除いた

●中央区の神社所在地 ●は稲荷神社



町人の街・中央区の全神社調査

◎中央区の神社の創祀期（由緒書・縁起書による）

年代	徳川氏の移封以前	江戸時代初期 (1590~1689年)	江戸時代中・後期 (1689~1867年)	明治	大正	昭和戦前	昭和戦後	不詳	合計
日本橋地区 (旧日本橋区)	12	9	9	3				3	36
京橋地区 (旧京橋区)	3	9	7	1	1	2	1	7	31

●江戸時代初期 徳川氏関東移封後とした ●江戸時代中・後期 元禄以降とした



朝日稲荷神社 一階に拝殿、奥殿が屋上にあるところは八官神社に似ている。銀座、大広・朝日ビル内

佃島住吉神社



社頭の由緒書・小網神社



町八社参り



事務所ビル2階に鎮座する稲荷神社



雀荘と隣り合せにひっそり、熊谷稲荷神社

増加した貸家、縮小した住宅面積

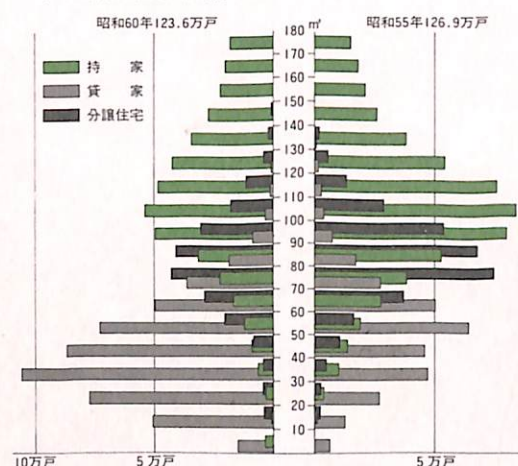
——昭和60年新設住宅着工戸数

昭和60年の住宅着工戸数は、5年ぶりに120万戸台に回復した。昭和55年に31.9万戸だった貸家が増加して、昭和60年には52.7万戸に達したことが原因。

昭和55年と60年の利用関係別・床面積別の分布をグラフで比較してみよう。

- ＜持家＞ ピークが、「100～110㎡」にあることは変りないが、この部分では55年より3万戸減って約5万戸になっている。平均床面積は119.4㎡が127㎡と広くなったが、総戸数は60.1万戸から46.4万戸に落ち込んだ。
- ＜分譲住宅＞ ピークは同じ「70～80㎡」のところにあるが、平均床面積は83.7㎡から79.2㎡に縮小、総戸数は32.3万戸が22.4万戸とほぼ3分の2に減少。
- ＜貸家＞ ピークが、「50～60㎡」から「30～40㎡」と狭い方に移り、40㎡以下の「ウサギ小屋」貸家が半分(47%)を占めている。小人数世帯の増加、設備の改善などの要因はあるが、全住宅の平均床面積は93.9㎡(55年)から83.4㎡(60年)に縮小している。

●床面積別新設住宅着工戸数
(「建設省建築着工統計」にもとづく作図)



▲第一住宅建設協会の経歴▼
昭和三〇年、第一生命保険相互会社の基金をもとに設立された財団法人であり、設立以来公益法人の理念にもとづき低廉な住宅の供給と、住宅にかかわる土地利用計画・居住環境計画・住生活改善に関する調査研究をつづけ、民間として稀有の建設大臣表彰と建設大臣感謝状をうけました。

▲本誌発行の趣旨▼
住宅戸数はすでに全世帯数を上まわり、しかも都市化がすすむなかで、私たちはより快適で充実した生活を求めています。堀で囲まれた敷地の中に豊かさを求めるだけでなく、膨大な資本の投下された市民のためのいろいろな都市の施設を、自分の生活の中に位置づけ上手に利用する方法を知ってほしいと思います。そのために、都市のいろいろな「しくみ」と使い方を西洋・日本の都市を事例にとりあげ、どなたにもあきることなくご理解いただけるよう、年二・三回の予定で編集発行していきたいと思っています。

■編集・発行・財団法人第一住宅建設協会
東京都中央区京橋2丁目4番12号
03-281-5773

編集・デザイン協力
株式会社アルシーヴ社・ライス・スタジオ
印刷・株式会社恒陽社印刷所
頒価・300円+送料200円

▲編集後記▼
今回は、宗教論でなく、都市のなかの神社仏閣のもつ空間の意義・機能について特集した。
○神社の参道を歩いていると、何かシャバと違う聖域をつくりだす作意があるように思える。鳥居による空間の仕切り、玉砂利による大地の違い、期待感を増幅する折れ曲る参道、急な階段により徐々に姿を見せる社殿・楼門による視界の絞り効果……等々。これらには仕掛けのルールがあるのだろうか。今年の三が日の初もうでは、全国で七、九五〇万人の人出があったという。祈願だけでなく、殺伐とした都会の中で歴然とシャバと異なる聖なる空間の環境神(上田篤先生談)に呼ばれるのだろうか。
○次号は、再度都市計画の各論をとりあげる予定。ご期待ください。

City&Life NO.6

●企画委員

日笠端(東京大学名誉教授)+日端康雄(筑波大学社会学系助教授)+高橋公子(日本女子大学住居学科助教授)+徳田敦司(当協会常務理事)+三輪恒(当協会理事)

●1986年5月発行



今日は団地の話をしましょうか。

いろいろ造りましたが、いちばん最初は東京都住宅公社の祖師谷団地でした。小田急沿線の祖師谷大蔵駅から少しいったところにあります。戦後すぐのことですから祖師谷大蔵といっても林や畑のあるようなところで、けっこう広い敷地がとれたのです。確かそこは東京都が持っていた土地だったと思います。

そこで団地としては新しい試みをやったのです。今は教授になっていますが、当時大学院生でうちの教室にいた川上秀光君とか宮沢美智雄君に調査や計画をやってもらい、建物の方は早稲田大学の武基雄さん(現第一住宅建設協会理事)に設計してもらいましたが、ようするにはじめて4時間日照というのを取り入れたのです。4階建てで、午前10時から午後2時まで日が当たるように間隔を離して建物を配置する、郊外だからやれたんですね。道路に木を植えたり、小さな商店街を団地のなかにつくったり、そういう総合的な団地はここが最初でした。

ところが、区会議員が見に来て、建物と建物の間があいているので「この間に1棟建つじゃないか」と言われました。そらぐれいゆったりとした余裕のあるプランだったのです。

この前、ひさしぶりに見に行ったのですが、一緒に行った者が「先生よく並木を残しましたね」と言うから、「これは団地をつくった時に植えたんだぞ」と言ったら驚いていました。木がとて大きくなくて、いい団地になっていました。もちろん当時は土地も安かった

まちづくり 思い出 ばなし ⑤

祖師谷団地—— 4時間日照という試み 高山英華

からね。今だったら、おそらくもったいないということになるでしょう。

この団地が建ってからですよ、4時間日照というのが一時はやったのは。ところが他のは例の縦隊でそれをやるわけです。あんまりみんながやるものだから面白くなかった。それで、もう少し変化をつけなきゃいけないというので造ったのが福岡の小笹団地。これは福岡の住宅公社でした。

ここでは、地形をできるだけ生かして、山をあまり崩さないプランをたてた。山のところにポイントハウスを建てたり、土地のスロープを利用してスターハウス(星型の建物)を建てたり、敷地をできるだけいじらないでいろんな場所に建物を建てたのです。そしたら今度は、いろいろ計算すると、水道管を曲げたりしなくてはならないので高くなる、無駄になるなんて言われました。ずいぶんつまらないこというなと思いましたがね。工事費の節約だといって縦隊で、どこも同じようにダーと建てるから人間性に欠けるようなものになってしまう。その結果せつかく建っても人の入らない団地になる。

団地だって、いいものをつくれれば残るのです。新しいことをやらなければダメですね。

(たかやま・えいか/東京大学名誉教授)



第一生命グループ
財団法人 第一住宅建設協会